
桜文論叢

第113巻 2025年9月

日本大学法学部

Nihon University
College of Law

目 次

資 料

サークル・テストに現れる

保健室登校の高校生の時間的展望の特徴

—— サークル・テストの画像解析の解釈より —— 和田 万紀 1

研究ノート

『源経氏歌集』四季部注釈稿（上） 鹿野しのぶ 62

論 説

『無名抄』原態系統本の本文について

—— 『無名抄』本文の再検証 —— 茅原 雅之 88

サークル・テストに現れる 保健室登校の高校生の時間的展望の特徴¹

—— サークル・テストの画像解析の解釈より ——

和田 万 紀

はじめに

本論は、和田（2025）が明らかにした保健室登校の高校生の時間的展望に関する特徴について、同じデータに対して新たな分析を行うことで、解釈を追記してその特徴を明らかにするものである。

和田（2025）は、サークル・テスト（Cottle, 1967）に現れる保健室登校の高校生の時間的展望の特徴について、画像解析を行い検討した。サークル・テストとは、心理的時間の1つである時間的展望の測定法の1種類であり、過去、現在、未来をそれぞれ表す3つの円を、白紙に自由に描画するという投影的方法の1つである。和田（2025）の画像解析では、過去、現在、未来を描画した3円の形態的、位置的指標から、時間的展望の特徴を検討した。

しかし同時に和田（2025）は、画像解析の結果からだけでは、時間的展望の特徴についての解釈が十分ではないことを指摘している。この点について、高崎・竹村・岩満（2005）も、投影的方法の1つである樹木テストの画像解析の結果について、心理学的解釈の重要性を主張している。さらに Shigemune, et al. (2021) は、サークル・テストの画像解析を行い、同じデータに対して従来の評価指標である時間的優位性と時間的関連性の指標から再分析を行い、両方

1 結果の一部は日本応用心理学会第90回大会（帝塚山大学，2024年8月）で発表して、本研究ではデータの再分析及び考察を追加した。

の結果を関連づけて時間的展望に関する解釈を行っている。

そこで本研究では、和田（2025）のサークル・テストの画像解析のデータに対して、従来のサークル・テストの評価指標から時間的優位性と時間的関連性の指標（Cottle, 1967; 日潟, 2008）を用いて再分析を行い、解釈と考察を追記する。そしてサークル・テストに現れる保健室登校の高校生の時間的展望の特徴について、小野村・須永・和田（2024）や和田（2019）、和田・小野村・須永（2023）の結果等を踏まえながら、総合考察することを目的とする。

サークル・テストによる時間的展望の測定

第1節 時間的展望の認知的側面と機能的側面

心理的な時間の概念や定義は多岐にわたる。その中の心理的時間として、時間的展望（time perspective）がある。時間的展望とは、ある一定の時点における個人の心理学的過去及び未来についての見解の総体（クルト・レヴィン著, 1942 末永（訳）1966, p.134-164.; 1943 猪俣（訳）1979, p.65-66.）と定義される。

白井（1996, p.384-386）によると、心理的時間は、過去から現在、そして未来へと3つの時間として特定の方向へ流れると同時に、それらの3つの時間の関連性が時間的展望に示されるという。

時間的展望は、その構造や内容の特徴を示す認知的側面以外にも、個人の感情や動機づけ、行動などに影響する機能的側面も含んでいる（白井, 1995）。例えば勝俣（1995）は、時間的展望の機能的側面について、過去へのフィードバックシステムと未来へのフィードフォワードシステムの機能を持ち、両機能ともにそれぞれ自己に対して肯定的及び否定的な影響を与えるという。時間的展望におけるこれらの2つの機能が作動することが、現在直面している心理的な不適応状態に対して、将来の適応にむけての行動を喚起する（勝俣, 1995, p.315）。これらを踏まえて和田（2019, p.18）は、時間的展望の、特に機能的側面の促進が精神的健康の支援につながる可能性を指摘した。

第2節 サークル・テスト (Cottle, 1967) による時間的展望の測定

時間的展望の測定方法には、時間的展望の定義や焦点を当てる側面によって多くの尺度が開発されて使用されている (例, 都築, 1982; 千島, 2021; Mohammed & Marhefka, 2020)。その中で言語を使用しない投影的方法の測定法の1つに、サークル・テストがある (Cottle, 1967)。サークル・テストは、個人の主観的な時間が、過去、現在、未来をそれぞれ表す3つの円で描画できると仮定して、白紙にこの3つの時間を表す3つの円を自由に描くものである。

その評価には、従来、描かれた3つの時間を示す3つの円の視覚的な特徴を指標として行われてきた (Cottle, 1967)。それは、描かれた3つの円の中で最も大きい円を示す時制を時間的優位性 (Temporal Dominance)、各円の重なりの有無や重なる時制を時間的関連性 (Time Relatedness)、円の大きさの順番で時間の重要性を示す時間的发展性 (Temporal Development)、などが指標とされて、各自の形成する時間的展望の特徴が評価される。サークル・テストによる時間的展望の評価は、その投影的な方法から、言語の種類に関係なく、多様性のある対象の時間的展望の測定を可能にするという利点を持つ (例, Wada, 2021)。

第3節 サークル・テストの定量的解析

サークル・テストの視覚的特徴の指標から時間的展望の特徴を評価することに加えて、Shigemune et al. (2021) は、サークル・テストに描かれた3つの円の面積や面積の比率などについて画像解析を行い、脳腫瘍の患者と健康な大人の時間的展望の特徴を検討すると同時に、時間的展望を介した精神的健康の支援策を明らかにしている。

まず、従来の指標による分析から、時間的優位性と時間的関連性の人数分布に、有意差は認められなかった。次に、生物画像解析に使用される画像解析ソフト ImageJ (三浦・塚田, 2016) を用いて、描かれた3つの円の面積等の画像解析を行い、それぞれの円の面積、円の面積全体に対する各円の面積との比率等を求めた。その結果、3つの円の各面積の差に、有意な効果が認められた。この Shigemune et.al. (2021) のサークル・テストの画像解析の結果は、次の

点を明らかにした。

第1に、サークル・テストの従来の指標である時間的優位性と時間的関連性に関する分析の結果だけでは有意差が認められなかった点が、円の面積の画像解析によって新たな知見として明らかにされたことである。これによって、サークル・テストの円の画像解析を含む定量的分析の有効性が示された。

第2に、時間的展望の従来の評価指標である時間的優位性に関する分析の結果から、時間的展望のフィードフォワードの機能を利用して、肯定的な未来展望の形成を支援することで、精神的健康の促進を可能にすることを示した点である。

そこで和田（2025）は、保健室登校と教室登校の高校生を対象としたサークル・テストの分析の結果について、円の面積と面積比、周長、3円のそれぞれの中心点間距離を、Shigemune et.al.（2021）と同様の画像解析を行い、円の描き方における差を検討した。円の面積と面積比及び周長は、それぞれの円の大きさ及び相対的な円の大きさを示す指標となる。また円の中心点間距離は、3つの円の2次元平面上の位置関係と、各円同士の距離を示す指標となる。その結果、次の2点が明らかになった。

まず過去と現在の円の中心点間距離についてのみ、両群の有意差が認められた。保健室登校群が教室登校群よりも、過去と現在の中心点間距離が離れており、現在と未来、過去と未来の中心点間距離には有意差がみられなかった。さらに、中心点間距離以外の他の指標である円の面積や面積比、周長には両群間の有意差は認められなかった。従って心理的時間を表す円の大きさには、3つの時間の描き方に差が無く、また保健室登校群が教室登校群よりも、過去と現在の中心点間距離のみが離れていたことから、過去と現在の円を離して描くことが明らかになった。

一方和田（2025）は、サークル・テストの画像解析の結果について、解釈の重要性を指摘している。特に保健室登校群の特徴として、過去と現在の円の描かれた距離が教室登校群よりも離れていること、さらに中心点間距離以外の他の指標には、教室登校群との有意差が無いことについて、時間的展望の特徴を

どの様に解釈するかという点である。

そこで本研究は、和田（2025）のデータを対象として、従来のサークル・テストの評価指標である時間的優位性と時間的関連性の指標を用いて、新たに再分析する。それによって、和田（2025）によるサークル・テストの画像解析の結果と、本研究の従来の評価指標からの結果とを総合して、保健室登校の高校生の時間的展望の特徴をさらに明らかにすることを目的とする。

目的と方法

第1節 目的

和田（2025）のサークル・テストのデータを対象として、従来使用されてきたサークル・テストの評価指標（Cottle, 1967：日潟, 2008）から、時間的優位性と時間的関連性の指標を用いて再分析を行う。そして和田（2025）のサークル・テストの画像解析の結果と、本研究による分析結果とを総合して、解釈を加えて考察することで、保健室登校の高校生の時間的展望の特徴をさらに明らかにする。

第2節 方法

調査対象と倫理審査

2022年4月から12月に X 高等学校保健室登校群 8 名と教室登校群25名を対象に調査を行った。日本大学大学院総合社会情報研究科倫理委員会（承認番号 HP21S008）、また高等学校、教育委員会の承諾を得た。さらに保護者と本人の両方の承諾書を得た場合のみを、分析対象とした。

手続き

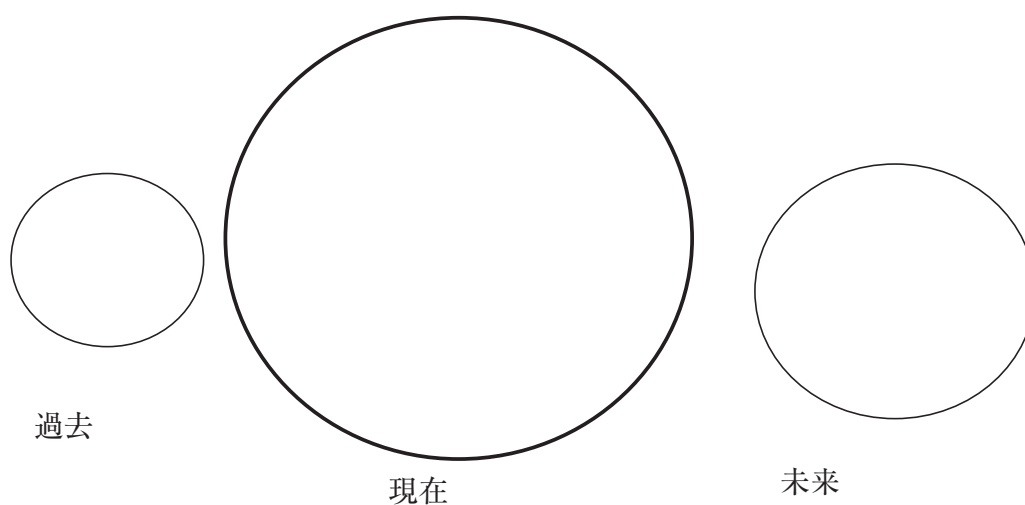
縦横各16cmの枠組みが描かれた A 4 版白紙を各自に配布して、自分自身の過去、現在、未来を表す3つの円を自由に描くように教示した。統計解析は、

JASP²を使用した。

分析

各自が描いた3円について、Cottle (1967) 及び日潟 (2008) を基にして、サークル・テストの評価指標である時間的優位性及び時間的関連性のそれぞれの指標に基づいて分類をした。時間的優位性の指標とは、描かれた3つの円の内の1つの円が、他の円より大きく描かれる場合に、その最大の円の時制が優位であるとした (Fig. 1)。なお全ての円が同じ大きさの場合や、2つの円が同じ大きさで他の1つが小さい場合も、最大の円は無しに分類して、時間的優位性の時制が示されていない分類とした。

Fig. 1 サークル・テストの時間的優位性の例 (現在優位)



次に時間的関連性の指標として、原子型 (Fig. 2-1), 接合型 (Fig. 2-2), 交差型 (Fig. 2-3), 包含型 (Fig. 2-4) を検討した。

2 Jeffreys's Amazing Statistics Program の略語である。

Fig. 2-1 サークル・テストの時間的関連性の例（原子型）

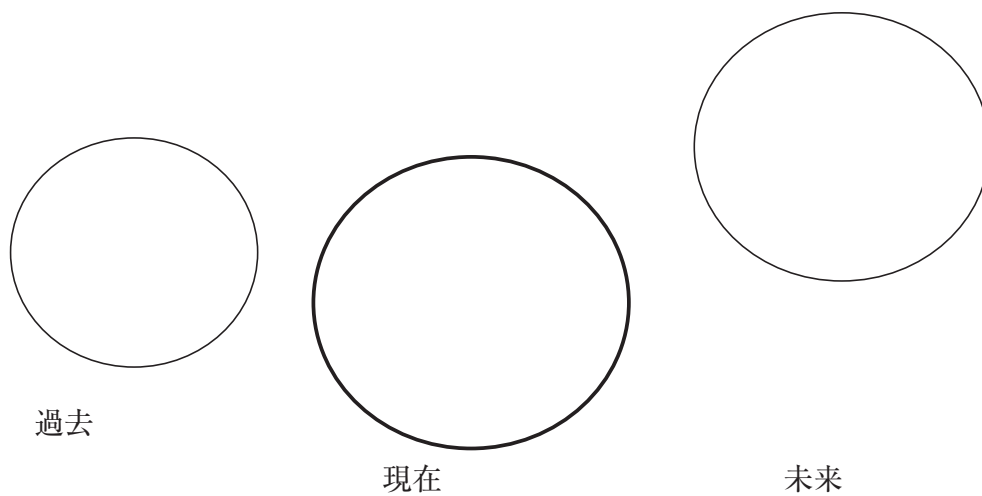


Fig. 2-2 サークル・テストの時間的関連性の例（接合型）

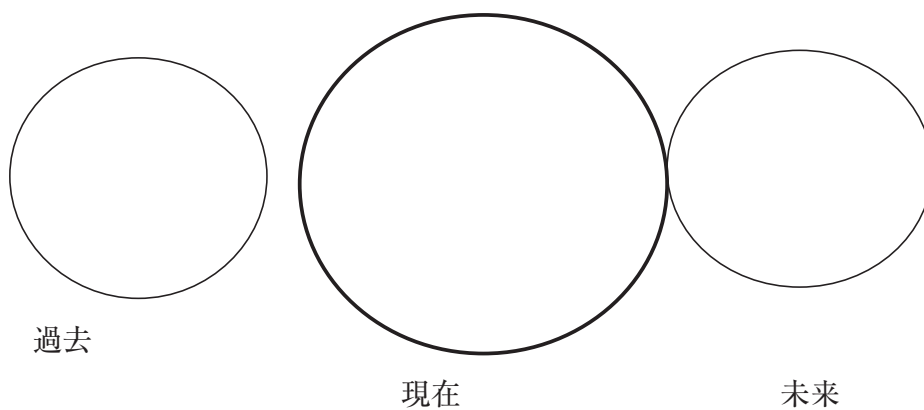


Fig. 2-3 サークル・テストの時間的関連性の例（交差型）

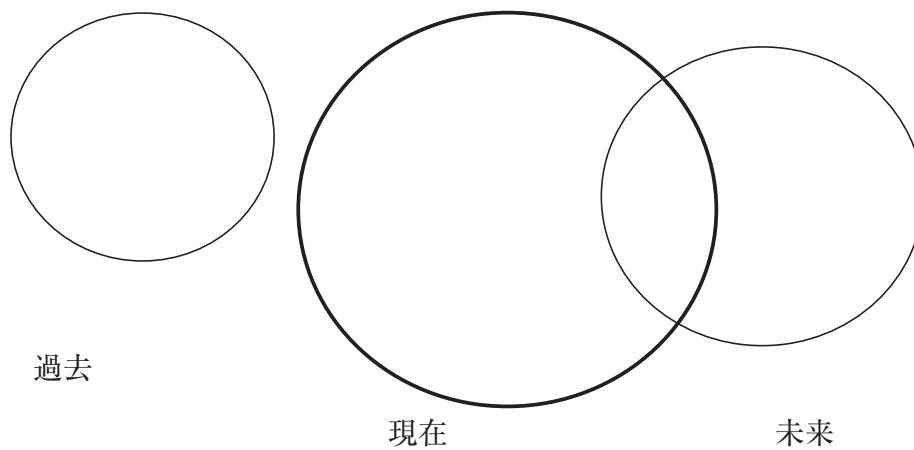
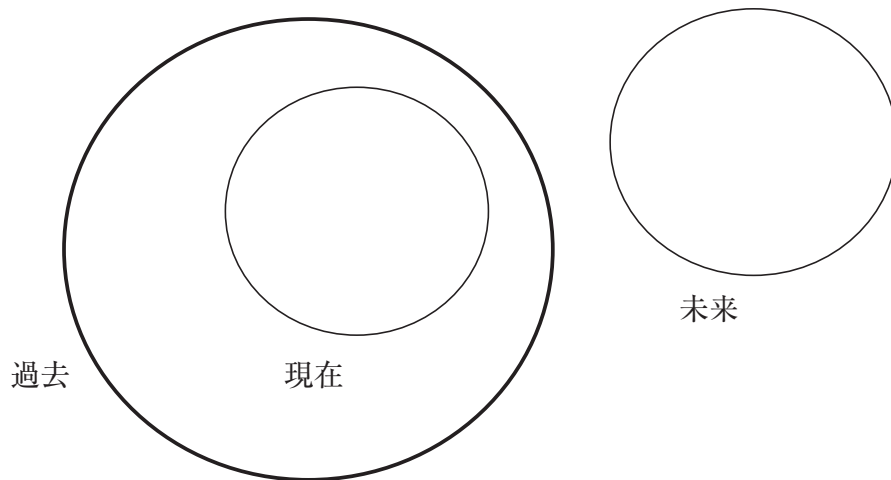


Fig. 2-4 サークル・テストの時間的関連性の例（包含型）



なお交差型は，3円の内でどの時間の円が交差したかを検討した。また接合型は，3つの円の内1か所以上の円が接合している場合を接合型に分類した。包含法型も，3つの円の内1か所でも包含する場合を包含型に分類した³。

各指標に関して，保健室登校群8名と教室登校群25名の2群間で，それぞれ分類される人数の割合を分析した。

結果

サークル・テストに描かれた3円の特徴を，従来のサークル・テストの指標である時間的優位性と時間的関連性についてそれぞれ分類して，保健室登校群と教室登校群の2群間で，その人数分布にFischerの正確確率検定を行った。なお，有意水準は5%水準として結果の検討を行う。

³ 円の交差や包含の個数を得点化して，評価する場合もある（Cottle, 1967）。

Table 1 時間的優位性

	未来		現在		過去	
	有り	無し	有り	無し	有り	無し
保健室登校群 8 名	4	4	3	5	1	7
教室登校群25名	13	12	6	19	3	22
Fisherの正確確率検定	$P = 1.000$		$P = .651$		$P = 1.000$	

まず，時間的優位性について（Table 1）。保健室登校群も教室登校群も，過去と現在を最大円としては描かない人数の方が多い。また両群とも，未来を最大円として描く人数と描かない人数がほぼ半数となった。いずれも両群間に有意差は無かった。時間的優位性については，両群ともに未来の円が最も大きくなる傾向がある。

保健室登校群だけではなく，教室登校群も，過去，現在，未来の時間的優位性には差がなく，過去や現在よりも未来が優位になる傾向がある。しかし，未来を優位に描く意味については，両群が同じか否かについては未解決であり，さらに検討が必要である。

時間的関連性について（Table 2）。3円をそれぞれ独立して描く原子型と，円の交差が有る型について，2群間で有意差が認められた。また円の中に円を含む包含型は，2群間で，傾向差が認められた。接合型には，2群間での有意差はみられなかった。保健室登校群は，原子型が有る人数が多いが，教室登校群は無い人数が多い。また円の交差型は，保健室登校群は無い人数が多いが，教室登校群にはその有無に人数差はほぼ無い。包含型は，保健室登校群も教室登校群も，無い場合の人数の方が多い傾向が認められた。

Table 2 時間的関連性

	原子型		接合型		交差型		包含型	
	有り	無し	有り	無し	有り	無し	有り	無し
保健室登校群 8 名	6	2	2	6	0	8	0	8
教室登校群25名	3	22	4	21	12	13	9	16
Fisherの正確確率検定	$P = .002$		$P = .616$		$P = .030$		$P = .073$	

保健室登校群は教室登校群と比べると、交差型、包含型のある人数が0人であり、これは、3つの時間を関連づけてとらえることが困難であることが示される。さらに原子型については、保健室登校群は有りが多く、逆に教室登校群は無いが多い。教室登校群とは異なり保健室登校群が、時間を過去、現在、未来を個別にしかとらえていないことが明らかになった。保健室登校群の時間的展望の特徴は、3つの時間を個別にとらえて、その3つの時間の関連性を見出すことが困難であることが明らかになった。

次に円の交差について (Table 3)。保健室登校群は、円の交差はどの組み合わせでも認められなかった。一方教室登校群は、過去と現在、及び現在と未来の交差が有る人数が多く、保健室登校群と有意差があった。なお、保健室登校群も教室登校群も、過去と未来の交差と、過去、現在、未来の交差を描く場合は無かった。

Table 3 円の交差

	過去と現在		現在と未来		過去と未来		過去, 現在, 未来	
	有り	無し	有り	無し	有り	無し	有り	無し
保健室登校群 8 名	0	8	0	8	0	8	0	8
教室登校群 25 名	16	9	17	8	8	17	6	19
Fisherの正確確率検定	$P = .017$		$P = .00092$		$P = .152$		$P = .296$	

保健室登校群は、全ての円の交差が描かれなかった。しかし教室登校群は、過去と現在、及び現在と未来について交差を描く人数が多い。教室登校群が、現在を中心として過去と未来の交差としてとらえることができることに比べて、保健室登校群は、現在という時間が過去と未来の交差点ではなく、過去や未来から独立した時間であることが明らかである。

保健室登校群は、時間的優位性において、未来が優位になる人数が、過去と現在と比べると多くなる傾向が示された。これは、保健室登校群が、過去と現在を独立させることで、現在において過去の切り離しを試みていること、そしてまた、現在と関連性を持たない未来に、肯定的な時間的展望を期待している

のではない。

保健室登校群は、時間的関連性について、円の交差や包含が無く、各円が独立して描かれる原子型が多いことが、特に教室登校群と異なる。保健室登校群が、過去、現在、未来の時間の間に関連性がみられず、特に過去と現在を、より離れた時間として展望している。一方教室登校群は、現在を中心として過去と未来との交差があり、現在を中心として時間を関連づけながら時間的展望を構築できることが明らかになった。

考察

保健室登校と教室登校の高校生を対象として、サークル・テストから時間的展望の特徴を分析した。分析指標として、過去、現在、未来のどの時間が大きく描かれて、優位であるのかという指標である時間的優位性と、過去、現在、未来のどの時間の間に交差を描いて、時間の関連性が描かれているか、という指標である時間的関連性から、時間的展望の特徴を両群で比較検討した。そして本分析結果から、以下の点が明らかになった。

時間的優位性については、過去、現在、未来において、保健室登校群と教室登校群の人数分布には有意差が認められず、両群共に、過去と現在は、優位性を示さない人数の方が多い。そして未来については、優位性の有無の人数が両群ともほぼ半数となっていた。時間的優位性については、保健室登校群と教室登校群との差は無いことが示されて、未来に優位性が示される割合は他の時間よりも両群とも多くなった。

次に時間的関連性については、保健室登校群は3つの時制の交差が0人となった。つまり、保健室登校群の過去、現在、未来は、独立した時間として関連性が無く構築されている、と解釈できる。一方教室登校群は、過去と現在、及び現在と未来の交差が認められた。これは教室登校群が、現在を中心として、過去と未来との時間的関連性を構築していると解釈できる。

これらの結果より、保健室登校群は3つの時制がそれぞれ独立して構築され

ており、時間的関連性が見られず、時間の連続性として過去、現在、未来という「時間の流れ」が認められない。一方教室登校群は、現在を中心として、現在と過去、及び現在と未来の時間的関連性が見られて、過去、現在、未来の時間の交差が示されることで、「時間が流れている」ことが示唆される。

そこで次にサークル・テストの画像解析を行った和田（2025）の結果と、本研究結果とを比較する。

第1に和田（2025）は、各円の面積、面積の比率、円の周長、つまり時間的優位性に関する指標と、円の中心座標の位置、つまり3円の2次元平面上の位置関係について、画像解析を行った結果、円の中心点座標の指標以外には、保健室登校群と教室登校群との有意差がないことを明らかにした。特に3つの円の面積とその比率、及び円の周長が両群に有意差が無かったことと、本研究結果の時間的優位性に両群の有意差が認められなかったことより、保健室登校群は教室登校群と同様に、過去、現在、未来のいずれについても特定の優位な時間を持たず、過去、現在、未来を示す円の描き方において、類似した時間的展望を持つと解釈できる。

第2に和田（2025）は、円の位置関係の指標である過去と現在の円の中心点座標間が、保健室登校群の方が教室登校群よりも有意に離れていることを明らかにした。これは画像解析という方法によって明らかされた点であり、保健室登校群の時間的展望の特徴として重要である。この点について、本研究結果は、時間的関連性において、保健室登校群が3つの円を単独に描いて原子型が多く、時間的関連性が見られないが、教室登校群が現在を中心として過去と未来に交差を描き、時間的関連性を示したことが重要となる。

まず保健室登校群の画像解析結果には、交差する面積が0となり、本結果の解釈と整合する。従って保健室登校群は、時間的展望において時間を単独にとらえて時間的関連性が見られないことが特徴といえる。さらに、特に中心点間距離が現在と過去の円において、より離れて位置づけられており、過去と現在を遠い関係としているという特徴がある。

一方教室登校群は保健室登校群と異なり、現在を中心に過去と未来にそれぞれ

れ交差を描き、時間的関連性が示された点が特徴である。五十嵐（1990, p39）は、高校生の時間的展望をサークル・テストで測定した結果、時間の流れや変化をとらえることによって、円の接近や接触、重なり、つまり時間的関連性が表現されると述べている。それは、時間的関連性がサークル・テストに描かれることによって、時間に対する心理的安定が示される、という解釈である。これによると高校の保健室登校群は、3つの時間の時間的関連性がみられず、3つの時間が独立して存在していることから、過去、現在、未来という時間に対する心理的安定が教室登校群よりも相対的に低く、特に過去と現在を表す円の距離が遠いことから、過去と現在の時間に対する心理的安定が教室登校群よりも相対的に低いと解釈できる。和田・小野村・須永（2023）と小野村・須永・和田（2024）は、高校の保健室登校群が、教室登校群よりもストレスが高いことを示している。時間的関連性に関する指標から得られる時間に対する心理的安定とストレスとの関連性については、さらに検討が必要となる。

和田（2025）の結果と本研究の結果を総合すると、高校の保健室登校群は、時間的展望において過去、現在、未来のどの時間も優位性が見られない。また、3つの時制の面積やその比率なども、教室登校群と有意差がなかった。これによって、保健室登校群と教室登校群は、時間的優位性については、特に優位な時制が特定されず、また円の描き方も同様となり、この点においては両群の時間的展望には差がない。一方、時間的関連性については、保健室登校群は過去、現在、未来という時間を、単独にとらえて時間的関連性が見られず、特に過去と現在の時間に関する心理的安定度が、教室登校群と比べて相対的に低いことが示唆された。3つの時間を単独にとらえて、時間的関連性が認められなかったことは、保健室登校群にとって、過去、現在、未来にわたって時間が流れる（白井, 2008）ということがなく、また、時間が統合されていないことが示唆される。

和田（2019）は、未来に価値を置き、未来を志向して、肯定的な未来展望であったとしても、必ずしも精神的健康を促進するとは限らないという。また日潟・齋藤（2007）、日潟（2008）が、高校生が未来にのみ肯定的な態度を示すと

精神的健康度の低さにつながることや、高校生がサークル・テストに未来優位性を描いても、それが必ずしも精神的健康とは関連していないと指摘した。本研究結果は、保健室登校群は教室登校群と同様に、必ずしも未来に優位性を示していなかった。つまり保健室登校群は、未来に優位性がみられなかったとしても、それが直接的には精神的健康の低下にはならないことが示された。従って、保健室登校群は特に3つの時間の時間的関連性を構築して、時間の流れを意識できること、そして特に過去と現在の時間的関連性の構築と、さらにそれが未来との関連性の構築にフィードフォワードとして機能するように支援することが、精神的健康に重要となることが示唆された。

和田・小野村・須永(2023)や小野村・須永・和田(2024)は、高校生の時間的展望の形成においては、過去展望が直接的に現在展望に影響するのではなく、自尊感情やストレス反応などの複数の要因を経由したうえで現在展望に影響することを示した。また保健室登校群は、中学で登校に困難が無い高校の教室登校群を比べると、現在展望がより否定的でありストレスが高いことを示した。これらの結果から保健室登校群には、過去展望と現在展望を仲介する諸要因の影響をさらに検討することで、それらの諸要因に働きかけながら、過去、現在、未来にわたる時間的関連性を構築して、時間に対する心理的安定度を高める必要があるだろう。

本研究結果より、サークル・テストに現れる保健室登校の高校生の時間的展望の特徴から、時間的展望の機能的側面を利用して、過去、現在、未来の間の時間的関連性を構築して、時間に対する心理的安定をより高めることが、精神的健康促進に寄与するといえる。

引用文献

- 千島雄太(2021). 時間的展望 小塩真司(編)非認知能力(p.115-132)北大路書房
Cottle, J. (1967). The Circles Test: An investigation of perceptions of temporal relatedness and dominance. *Journal of Projective Techniques & Personality*

Assessment, 31(5), p.58-71. <https://doi.org/10.1080/0091651X.1967.10120417>
2025年5月5日参照

日潟淳子・齋藤誠一 (2007). 青年期における時間的展望と出来事想起および精神的健康との関連 発達心理学研究, 18, (2), p.109-119. <https://doi.org/10.11201/jjdp.18.109> 2025年5月5日参照

日潟淳子 (2008). 高校生と大学生におけるサークル・テストによる時間的展望の検討—時間的態度と精神的健康との関連から— 神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要, 1, (2), p.11-16. <https://doi.org/10.24546/80060019> 2025年5月5日参照

五十嵐敦 (1990). 青年期の時間的展望—Cottle's Circle Testの検討と分析— カウンセリング研究, 23, p.133-141.

勝俣暎史 (1995). 時間的展望の概念と構造 熊本大学教育学部紀要 人文科学, 44 p.307-318. <http://hdl.handle.net/2298/1047> 2025年5月5日参照

レヴィン, K. (1942). 末永俊郎 (訳) (1966). 社会的葛藤の解決 グループ・ダイナミックス論文集 創元新社

レヴィン, K. (1943). 猪俣佐登留 (訳) (1979). 社会科学における場の理論 誠信書房

Mohammed, S.M., & Marhefka, J.T. (2020). How have we, do we, and will we measure time perspective? A review of methodological and measurement issues. *Journal of Organizational Behavior*, 41, p.276-293. <https://doi.org/10.1002/job.2414>
2025年5月5日参照

三浦耕太・塚田祐基 (2016). ImageJで始める生物画像解析 学研メディカル秀潤社

小野村樹美・須永範明・和田万紀 (2024). 中学の登校傾向が高校入学時の時間的展望と精神的健康に与える影響—中学登校群の高校適応促進要因— 応用心理学研究, 49, (3), p.236-237. https://doi.org/10.24651/oushinken.49.3_236 2025年5月5日参照

Shigemune, Y., Saito, S., Hiromitsu, K., Hamamoto, K., Ochi, R., Shinoura, N., Yamada, R., & Midorikawa, A. (2021). Depression and time perspective in patients with brain tumors: Novel measurements in the circle test. *Journal of Affective Disorders Reports*, 4. <https://doi.org/10.1016/j.jadr.2021.100084> 2025年5月5日参照

白井利明 (1995). 時間的展望と動機づけ—未来が行動を動機づけるのか— 心理学評論 38, (2), p.194-213. https://doi.org/10.24602/sjpr.38.2_194 2025年5月7日参照

白井利明 (1996). 第7章第1節 時間的展望とは何か 松田文子・調枝考治・甲村和三・神宮英夫・山崎勝之・平伸二編 心理的時間 北大路書房, p.377-442.

白井利明 (2008). 自己と時間—時間はなぜ流れるのか— 心理学評論, 51, (1), p.64-75. https://doi.org/10.24602/sjpr.51.1_64 2025年5月5日参照

高崎いゆき・竹村和久・岩満優美 (2005). 描画から「心理」を解釈する—樹木テストの画像解析と臨床心理学的解釈— 感性工学研究論文集 5, (3), p.155-164. https://doi.org/10.5057/jjske2001.5.3_155 2025年5月5日参照

- 都筑学 (1982). 時間的展望に関する文献的研究 教育心理学研究 30, (1), p.73-86.
https://doi.org/10.5926/jjep1953.30.1_73 2025年5月5日参照
- Wada, M. (2021). SELF AND TIME -An Asian perspective on cultural psychology-
*From the Era of National identity to the Era of the Asian Community that
Citizenship Creates. Lecture Paper Collection 2020-2021.* p.95-109. Bangkok
University International Donation Course Supported by Eurasia Foundation from
Asia (formerly One Asia Foundation).
- 和田万紀 (2019). 時間的展望と精神的健康 —過去, 現在, 未来から立ち現れる「現在の
拡がり」— 桜文論叢 100, p.1-22.
- 和田万紀・小野村樹美・須永範明 (2023). 高校入学時の時間的展望と精神的健康が登
校回避感情に与える影響 —高校入学時オリエンテーションでの調査より— 日本応
用心理学会第89回大会 (亜細亜大学) 発表論文集 1A-3
- 和田万紀 (2025). 保健室登校の高校生の時間的展望の特徴 —心理的時間と精神的健康
— 桜文論叢 112, p.45-65.

『源経氏歌集』 四季部注釈稿（上）

鹿 野 し の ぶ

【本稿の意義】

『源経氏歌集』は、東京大学史料編纂所蔵（所蔵者番号 貴11・1）室町時代初期写本のための孤本である。三九八首を収め、自撰家集とされる。作者の源経氏は南北朝後期の武将細川経氏のことであり、先行研究では系図の注により経氏は初名を業氏といい、勅撰集の『新拾遺集』に業氏として一首、『新後拾遺集』に経氏として三首と見えることから『新後拾遺集』が成立した至徳元年（一三八四）の頃に業氏は経氏と改名したかとされてきた。

ところが、『勅撰作者部類』では業氏と経氏は別項目に立てられるなど「経氏」を業氏と見てよいのか疑問が残る。稿者は「『源経氏歌集』考」（日本大学国文学会『語文』百七十八輯 令和七年一月）において系図、史料などを再調査し、分析した結果、「経氏」とは業氏息の満経の初名であると結論づけた。

これにより歌の解釈にも影響があると考え、歌集の、特に四季部に注釈を附したものが本稿である。四季部を取り上げる理由は以下の通りである。四季部は季節・時間の推移に沿って詠まれるため、歌人の基礎的な詠歌の

力量を知るに適している。また本歌集の最大の特徴は二条為遠・二条良基など当代歌壇の重鎮たちによる合点が付されている点である。その評価の検討を行うにも前述の理由によりふさわしい。加えて、応永二〇年頃に耕雲が將軍足利義持の命を受け、「書入注」も加えている。この書入注が四季部に見られる点（注釈稿（下）冬歌二一八番）が挙げられる。さらに四季部の詞書には細川家を始めとする「経氏」の交流が知られる人物の名が見られる（秋歌一二六番「右馬頭入道道源家」、一六六番「右京大夫」、冬歌二二四番「武蔵守」・「御子左大納言」など当時の歌壇を考える上で重要な情報が記される点も挙げられる。

当時の歌壇の一端を知る注目すべき歌集の和歌について、詳細に分析することにより「経氏」の和歌の実力と当代きつての歌人の評価について明確することができると考える。

【凡例】

- 1、本稿は東京大学史料編纂所蔵『源経氏歌集』（番号 貴11・1）の四季部歌の注釈である。四季部の歌数は二二七首あるため、上（凡例・春歌）・中（夏歌・秋歌）・下（秋歌・冬歌）の三部に分けて掲載の許可を得た。
- 2、【本文】には1、を底本とし翻刻し漢字仮名表記を改め、底本の表記を右傍に記し、補った送り仮名は（ ）に入れて、整定本文を示した。なお、底本に改訂本文があるときは「」に入れて示し、語釈で補説を行った。

- 3、本歌集の特徴として、当代歌人の重鎮たちによる合点が付されていることが挙げられる。歌集巻末に見られる注記を示すと次のようになる。※は稿者による注記であり、【合点】の項目にはへゝ内の表記で示した。なお、最末尾に「御点外御自撰」とあり、合点がないものは、「経氏」自身が選んだ歌である。

- 墨 故宗匠為遠 ※二条為遠〈為遠〉
 - 朱 今宗匠為重 ※二条為重〈為重〉
 - 左朱 摂政殿二条 ※二条良基〈良基〉
 - 左 四辻殿于時大納言 ※四辻善成〈善成〉
 - 星 花町中書王 ※廉仁王 〈花町〉
- 4、【詞書】には歌題や詞書に記される人物などについて、注を付した。『千首』題とは『中院千首』題を指す。『堀河百首』『永久百首』の題は歌学用語として「堀河百首題」「永久百首題」と表記した。「藤川百首題」に見られる場合にはその題意を記す三条西実枝著『初学一葉』（『日本歌学大系』六 風間書房）を適宜引用した。なお、歌題の読み方については、『明題部類抄』（新典社）によった。
- 5、【口語訳】には和歌表現に忠実になるよう心がけ口語訳を附した。
- 6、【語釈】には必要に応じて和歌に用いられている言葉について語義を附し、和歌修辭に言及した。
- 7、【参考】には本歌や想定される参考歌、類歌、本説としての物語などを示した。
- 8、【補説】には和歌の解釈や詠歌背景などについて必要に応じて、解説を附した。
- 9、解釈するにあたって、特に以下の先行研究の学恩を多く受けた。各注釈に逐一記していないが、稿者は本稿を基に経氏の歌風の特徴について論じる用意があり、その際に改めて謝辞を示したい。岩波書店・新大系、明治書院・和歌文学大系、小学館・新全集、岩佐美代子『玉葉和歌集全注釈』同『風雅和歌集全注釈』（笠間書院）、片桐洋一『古今和歌集全注釈 上中下』（講談社学術文庫）、久保田淳『藤原定家全歌集 上下』（ちくま学芸文庫）、小田勝『実例詳解古典文法総覧』（和泉書院）
- 10、なお、紙幅の都合で参考歌の詞書や『初学一葉』の一部を略した場合がある。

【注釈】

春歌

年中立春

一 をしめどもとまらぬもの之行（く）年としにいかでか春の立（ち）返帰るらむ

【合点】 善成

【詞書】 「年中としのうちの立春」。

【口語訳】 いくら惜しんでも止まらずに行く年にどうして春が引き返してくるのだろうか。

【語釈】 ●いかでか―副詞「いかで」に疑問の係助詞「か」で「どうしてゝか」。●春の立ち返るらむ―「立ち返る」は一年の内にもう一度春が引き返してくる、の意。「らむ」は現在推量の助動詞で係助詞「か」を受け、係り結びで連体形。

【参考】 「をしめどもとどまらなくに春霞かへる道にしたちぬとおもへば」（『古今集』春下・一三〇・「春を惜しみてよめる」・在原元方）

【補説】 元方歌のように、行く春が留まらず惜しまれるとされるが、年内に再び春が立ち返ってくるのはどうしてだろうとする。

立春

二 神代よりいくとせ春の立たちぬ「とか」今日は磐いはと戸のあけがたの空

【合点】 為重

【詞書】「春立つ」。堀河百首題。

【口語訳】神代からどれほどの年月が流れ春がたったというわけなのか。今日はあの天照大神が天磐戸を開けて出られた時のような夜明け方の空よ。

【語釈】●立ちぬとか―底本「らん」を見せ消し「とか」とする。「立ちぬとか」は不確実な想像・伝聞を表す。●磐戸―磐でできたとびら。●あけがたの空―「あけ」に「(磐戸を)開け」と「(夜が)明け」とを掛ける。

【参考】「春たつとけふはいはとの神代よりあくればかすむ天のかぐ山」(建保四年『内裏百番歌合』春・四番右持・八・藤原経通)

【補説】天照大神が天磐戸に隠れて世の中が常闇になった時、八百万の神々が神楽をそうして大御神の出現を得た神話による。浅田徹氏「神話の立春」(『徳江元正先生退職記念 鎌倉室町文学論纂』三弥井書店 平成一四年) 参照。

三 三輪の山あくる尾上^{おのへ}の霞^{かす}まずは今日^{けふ}さへ春^{はる}をいかに待ち^まみむ

【合点】善成

【詞書】二番歌「立春」題を受ける。

【口語訳】三輪山で夜が明けて山頂が霞むことがなかったならば、(立春という)今日さえも春をどんなにか待ちかねることだろう。

【語釈】●三輪の山―大和国の歌枕。現在の奈良県桜井市東北部。『古今集』「我が庵は三輪の山もと恋しくはとぶらひきませ杉立てる門」(九八二)と恋しい思いで訪ねてくる場所の意を踏まえて、春の訪れを待つとする。

●尾上―山の頂。●霞まずは―打消の助動詞「ず」の未然形に接続助詞の「は」で順接の仮定条件を表す。●さ

へ―類推の副助詞。さえも。

【参考】「三輪の山いかにまち見む年ふともたづぬる人もあらじと思へば」〔古今集〕恋五・七八〇・伊勢

早春浦

四 志賀の浦の波は氷もとけぬ間にまづ立ちそむる朝霞かな

【合点】 為遠

【詞書】「早春の浦」。『千首』題。

【口語訳】 志賀の浦の波は氷も溶けない間にまず初めに朝霞が立ち始めるのだな。

【語釈】 ●志賀の浦―近江国の歌枕。現在の滋賀県大津市、琵琶湖西南付近。 ●氷もとけぬ間に―題の「早春」を表す。 ●立ちそむる―「（波が）立ち」と「（朝霞が）立ち」とを掛ける。

【参考】「さ夜更くるままに汀やこほるらん遠ざかりゆく志賀の浦波」〔後拾遺集〕冬・四一九・快寛法師

子日

五 万代とかぎりやはせん子の日してつきせぬ春を祝ふ心は

【合点】 花町

【詞書】「子の日」。堀河百首題。

【口語訳】 万代にも渡りますようにと限るだろうか、いや限らないよ。この子の日の松を引きながら尽きることのない春を祝う心は。

【語釈】 ●万代―いつまでも長く続く世。 ●かぎりやはせん―「やは」は反語の意。「ん（む）」は推量の助動詞連体形。係り結びで二句切れ。

【参考】「春日野に若菜つみつつよろづ世を祝ふ心は神ぞしるらむ」（『古今集』賀・三五七・素性法師）

【補説】「万代」ということでさえも限りを表現してしまう、尽きることのないこの世の春を歌った機知に富んだ表現。

春の歌の中に

六 ふるほどはこほりし雲も山の端^葉の雪より上^{うへ}に霞^{かす}みそめつつ、

【合点】 为重

【詞書】「春の歌を詠みました中に」。

【口語訳】雪が降っている間は凍っていた雲も（春となり）山の端に積もった雪よりも上に霞み始めている。

【語釈】 ●ふるほどは―「（雪が）降る」に「（時が）経る」を響かせるか。

【参考】「今朝もなほ山は雪氣の空ながら雲も霞みて春はきにけり」（『壬二集』八〇一）

山霞

七 待ち^まえたる都^との空^{そら}はなほ冴^さえて遠^とき山^{やま}辺^べにかすむ春かな

【合点】 善成

【詞書】「山霞」。『千首』題。『為重朝臣詠草』（七〇）康暦二年四月二〇日歌会で出題。

【口語訳】待ち望んでいる都の空は変わらずに冴えて、遠い山辺に霞んでいる春だな。

【語釈】●待ち得たる―春の到来を待ち望む。『源氏物語』（宿木）に「優曇華の花待ち得たる心地して」と見える。

●なほ冴えて―依然として冷たい空気が漂っている。

【参考】「春きても都の方は空晴れて山の端ばかり立つ霞みかな」（『洞院撰政百首』春・七六・藤原光俊）

八 いまはまづ春のみどりもよそにのみ見えてぞ霞む葛城の山

【合点】善成

【詞書】七番歌「山霞」題を受ける。

【口語訳】今はともかく春の緑も他所にばかり見えて霞んでいる、葛城の山は。

【語釈】●いまはまづ―「まづ」は「先づ」で何はともあれ、とりあえずの意。『新編国歌大観』では「いまはまづ」と濁音で読んでいる。あるいは「まつ」と清音で読み、「待つ」と「松」（「緑」の縁）と詠んだか。その場合は「今はまだ待っている、松のような春のみどり」と解せるか。●見えてぞ霞む―係り結び。●葛城の山―底本「からきの山」とあり、「か」と「ら」の右傍に「つ」と補筆される。「葛城山」は大和国の歌枕。現在の奈良県と大阪府の県境に連なる山系。

【参考】「葛城や高間の山の桜花雲井のよそに見てや過ぎなん」（『千載集』春上・五六・藤原顕輔）

九 都よりへだつる中と霞めるや遠山鳥の尾上なるらむ

【合点】為遠

【詞書】七番歌「山霞」題を受ける。

【口語訳】都から遠ざかっているので霞んでいるのか、遠くの山の山鳥がいる尾上であるだろう。

【語釈】●へだつる中——「中」は二つの物の間。都と遠山をいうが、山鳥の雌雄が離れて寝ることから間柄の意味、「仲」も響かせ、恋の要素を含ませている。●霞めるや——「や」は疑問。●遠山鳥——山鳥の異名。「遠くの山」の意を掛ける。●尾上なるらむ——「尾上」は山の頂。峰。「(山鳥の)尾」を掛ける。「なる」は断定の意。「らむ」は現在推量の助動詞。

【参考】「暮れかかる遠山鳥の尾上よりまだきへだててたつ霞かな」(『頓阿句題百首』二・「遥峰帯晚霞」・良守)。

朝霞

一〇 やがてまた霞^又みにけりなほのぼ^ぐのと見えて明^あけぬる杉のむら立ち

【合点】為遠

【詞書】「朝霞」。

【口語訳】すぐにまた霞んでしまったのだなあ。夜が明けて、朝霞の中からぼうっと見えてきた群れ立つ杉の緑は。

【語釈】●霞みにけりな——「霞む」の連用形。その状態が発生した意の助動詞「ぬ」の連用形に気づきの意の助動詞「けり」が接続した表現。「な」は詠嘆の終助詞。●ほのぼのと——夜がほんのりと幽かに明けてゆく様子。朝霞の中にはつきりとは見えないが杉が翳んで見える様子を表現。●あけぬる——「明く」は夜が明けて、空が明るくなる様子。●杉のむら立ち——群生する杉。

【参考】「春の夜のあけのそほぶねほのぼのといく山本を霞みきぬらん」（『続古今集』春上・四八・「元久の詩歌合に、水郷春望といふことを」・藤原良平）

山霞

一一 春を経てにぎはふ民の竈門山^{かまどやま}かすむや絶えぬ煙^たなるらむ

【合点】 善成

【詞書】 七番歌参照。

【口語訳】 幾年もの春を過ごして賑わう民の竈の名を持つ竈門山よ。霞んでいるのは絶えることのない民が竈で煮炊きする煙なのだなあ。

【語釈】 ●竈門山―筑前国の歌枕。現在の福岡県太宰府市・筑紫野市・粕屋郡にまたがる宝満山。「竈」を掛ける。●絶えぬ煙―「煙」は「竈（門山）」の縁。民の生計が豊かになったことを示す。

【参考】「高き屋にのぼりてみれば煙立つ民の竈はにぎはひにけり」（『新古今集』賀歌・七〇七・「貢物許されて、国富めるを御覧じて」・仁徳天皇）

【補説】【参考】に挙げた仁徳天皇歌を踏まえ、当代主君の予祝とする。

名所歌よみ侍るとて、志賀浦春を

一二 こほりゐし汀^{みぎは}〔の〕浪も立ちそめてをちかた霞^{かす}む志賀^{しが}の浦風^{かぜ}

【合点】 为重

【詞書】「志賀浦の春」。「名所歌」の詠歌年次は未詳。

【口語訳】凍つてとどまっていた汀の波も立ち始めて遠方はすっかり霞んでいる、志賀の浦で風が吹いたので。

【語釈】●汀の浪も―底本「みきは」の「は」は判読不明文字の上に重ね書きされ、「の」は右傍に補筆される。

●志賀―四番歌参照。

【参考】「こほりゐし志賀の唐崎うちとけてさざ波よする春風ぞ吹く」（『詞花集』春・一・大江匡房）

湖上朝霞

一三 志賀の浦やなぎたる朝に漕ぐ舟も霞の浪をわけまよひつつ、

【合点】為遠・善成・耕雲

【詞書】「湖上の朝霞」。藤川百首題にも見える。題意は『初学一葉』に「湖上とはみづうみをいふなり。（略）みづうみなれば、しほならぬ海の心をいひ（略）、志賀の浦。（略）皆湖辺の名所なれば思ひ寄すべし。湖上の上の字は虚字にて心なし。（略）扱て此の類題の心は、湖辺はさらでものどかなるに、春来りて霞みわたり、浦漕ぐ舟のけしきまでしづかなる心、先づ此の題の大意なるべし、（略）春の霞ののどかに立ちわたる心を詠ぜんも又ひとつ趣向なるべし」とある。

【口語訳】志賀の浦では、風が止んで晴れ渡っている朝に漕ぐ船も霞が波のように立っているのですその間を分け進みさまよっているのだな。

【語釈】●志賀の浦や―四番歌参照。「や」は地名を提示する間投助詞。●なぎたる―風がなく波も穏やかな様子。

【参考】「須磨の浦のなぎたる朝はめもはるに霞にまがふ天の釣り舟」（『新古今集』雑中・一五九八・藤原孝善）

河霞

一四 氷（り）ぬし岩間の浪もたつた川かすみの下を水くぐるなり

【合点】 為重

【詞書】 「河霞」。『千首』題。

【口語訳】 凍ってとどまっていた岩間の波も春が来て溶けて立っている竜田川では霞の下を水が潜っているのだな。

【語釈】 ●たつた川―「龍田川」は大和国の歌枕。現在の奈良県生駒郡斑鳩町・三郷町の一帯。「（浪も）立つ」を掛ける。●水くぐる―「霞の下を」とあるので「潜る」と解した。『顕注密勘』には、「水くぐるとは、紅の木の葉の下を水のくぐりてなると云歟。潜字をくぐるとよめり」とある。

【参考】（本歌）「ちはやぶる神世もきかず竜田河唐紅に水くぐるとは」（『古今集』秋下・二九四・在原業平）

【補説】 本歌の業平歌で詠まれた括染めした唐紅色の秋の世界を霞や浪といった白色の春の世界として詠んだ。

雪中鶯

一五 打ち霧らしつもりもやらで降る雪を春のしるべと鶯ぞ鳴（く）

【合点】 為遠

【詞書】 「雪の中の鶯」。『千首』題。

【口語訳】 視界をさえぎって雪が降り続いているが積もる様子ではなく降る雪を春の訪れる印だとして鶯が鳴いている。

【語釈】 ●打ち霧らし―「霧らす」は霧で曇らせるの意。視界をさえぎる様子。ここでは雪がしきりに降ってはいるものの春の淡雪であるため積もらない景色を想起している。【参考】 歌参照。

【参考】 「うちきらし雪はふりつつしかすがにわが家のそのに鶯ぞなく」（大伴家持、『万葉集』巻八・一四四一、『拾遺集』春・一一）

鶯

一六 住み捨てぬ古巢もしるく山里の垣穂の竹に鶯ぞ鳴く

【合点】 為重

【詞書】 「鶯」。堀河百首題。

【口語訳】 住み捨てない古巢もはつきり分かるように山里の高い垣穂の竹に鶯が鳴いている。

【語釈】 ●住み捨てぬ―「住み捨つ」は住んでいた巢を離れてそのまましている状態。「ぬ」は打消の助動詞「ず」の連体形。●古巢―古びているが住み慣れた巢。●しるく―「著し」は、はつきりしているの意。

【参考】 「鶯の今朝鳴く時ぞ山がつかきほも春に逢ふこちする」（『玉葉集』春上・四八・「宝治百首歌たてまつりけるに朝鶯」・後鳥羽院下野）

谷鶯

一七 鶯のなげども牙ゆる谷風に涙のつらいかでとくらむ

【合点】 善成

【詞書】「谷の鶯」。

【口語訳】鶯が鳴いても冷え切った谷風に涙のつらははどうして溶けるのだろうか。

【語釈】●なけども―鶯が「鳴く」に【参考】に挙げた本歌で鶯を擬人化して捉えた「泣く」を響かせ、下句で「涙」と表現する。

【参考】（本歌）「雪の内に春は来にけり鶯のこほれる涙今やとくらむ」（『古今集』春上・四・読人しらず）、「鶯の涙のつららうちとけてふる巢ながらや春を知るらむ」（『新古今集』春上・三一・惟明親王）。

羈中聞鶯

一八 行（き）暮るる山下道のすゑみればなびくかすみに鶯ぞ鳴く

【合点】善成

【詞書】「羈中に鶯を聞く」。藤川百首題にも見える。題意は『初学一葉』に「羈中は羈旅ともいひて遠き旅なり。（略）鶯は春のはじめより鳴くものなれば、先づのどかなる心を詠すべし。（略）此の題には都の恋しさを鶯のこゑにおもひ、分け行く春の野山に聞初めて珍しき心など読むべし。」とある。

【口語訳】行く途中で日が暮れる山の下の道では、その先の方はまだ暮れておらず霞がなびいているのが見え、鶯が鳴いている。

【語釈】●行き暮るる―旅の途中で日が暮れる。●すゑ―その先。●鶯ぞ鳴く―係助詞「ぞ」を受け「鳴く」は連体形で係り結び。

【参考】「行きくるる山路のすゑのやどなれや入相の鐘の音ぞ聞ゆる」（『永享百首』旅・九四一・性脩）

名所残雪

一九 比良〔の〕海や氷のひまの山^{やま}かげにみなそ^{(マ)ふか}深く雪ぞ^{のこ}残れる

【合点】 良基

【詞書】 「名所の残雪」。『経氏集』の他未見。

【口語訳】 比良の海では氷の隙間に映る山の姿を見ると、水底に深く雪が残っている。

【語釈】 ●比良の海―底本「比良の」の「の」を「野」と書き始めた後、少々擦って「の」と記している。「比良の海」は近江国の歌枕。現在の滋賀県大津市にある琵琶湖。「や」は地名の提示。●みなそ深く―「こほり川みなそこふかく」とちてけり早く流れし音も聞こえず」（『夫木抄』雑六・一一一六九・禰式部）などの用例から「みなそこふかく」として解釈した。

【参考】 「比良の海は高嶺のかげやうつるらん跡なき波に降れる白雪」（『草庵集』七九七・「湖雪」）

若菜

二〇 春日野の雪まの若菜^{わか菜}待（ち）わびてこほる沢辺にねぜりをぞ摘む

【合点】 為遠・耕雲

【詞書】 「若菜」。堀河百首題。

【口語訳】 春日野の積もった雪の間から生える若菜を待ちわびて、凍る沢辺に根芹を摘むよ。

【語釈】 ●春日野―大和国の歌枕。現在の奈良市春日野町あたり。●ねぜりをぞ摘む―「ねぜり」は根の部分を食用とする芹。「ぞ」「摘む」は係り結び。

【参考】「春日野の雪げの沢に袖たれて君がためにと小芹をぞ摘む」（『堀河百首』春・七一・「若菜」・藤原仲実）

田辺若菜

二一 まかすべき田中の井戸のこほる間にまづ降りたちてねぜりをぞ摘む

【合点】善成

【詞書】「田の辺若菜」。ほとり藤川百首題にも見える。題意は『初学一葉』に「田畔若菜」として、「畔の字、くろと読む字なれど、こゝにては辺の字の心なるべし。（略）若菜は春の始めに摘むものなれば、春の浅き事を云ふべし。沢辺に読めるは多くの若菜とて芹の事なり。（略）」とある。

【口語訳】水を引く田中の井戸の凍るその間に、まず田に降りたつて根芹を摘むよ。

【語釈】●まかす―「引す」と表記し、水を引き入れるの意。●ねぜりをぞ摘む―二〇番歌参照。

【参考】「ねぜり摘む春の沢田に降り立ちて衣の裾の濡れぬ日ぞなき」（『金葉集』初度本・春・三一、『好忠集』二〇・「正中中」）

春雪

二二 佐保姫の霞の衣白妙に雪吹（き）乱す春の山風さほひめ かすみ ころも みだ かぜ

【合点】為重

【詞書】「春の雪」。

【口語訳】佐保姫がまどっている霞の衣がさらに真っ白になったのは雪を吹き乱す春の山風が吹いたためである。

【語釈】 ●佐保姫―春を司る女神。 ●雪吹き乱す―先行例は少なく、管見では「先だちて過行くともも見えぬま
で雪吹きみだす野べの夕風」(『持明院殿御歌合 康永元年十一月四日』廿四番 左勝・四七・花園院)という用例を見る。
【参考】「佐保姫の衣はる風なほさえて霞の袖にあは雪ぞ降る」(『続後撰集』春上・二〇・「早春霞といへる心を」・嘉
陽門院越前)

梅風

二三 なほ^{をさ}冴^{よも}ゆる四方の木ずる^る嵐にもひとり春^し知る梅^{むめ}が香^くぞする

【合点】 花町

【詞書】「梅の風」。『千首』題。

【口語訳】 あちらこちらの梢には依然として冷たく吹く嵐に対しても、まるで私一人だけが春の訪れを知っているといわんばかりに梅の香りがする。

【語釈】 ●なほ冴ゆる―春になってもまだ冬の名残で冷たい風が依然として吹いている様子を表す。「猶さゆる嵐は雪を吹きまぜて夕ぐれさむき春雨の空」(『玉葉集』春上・三三・永福門院)。 ●ひとり春知る―梅の花だけが春の到来を知っているということ。「白雪の降りて積れる谷かげにひとり春しる鶯の声」(『隣女集』九三三)。 ●梅が香ぞする―春がやってきたことを知るすべとして梅の香りが漂っていることをいう。

【参考】「猶さゆる雪につつめる声ながら梅がえわきて鶯ぞ鳴く」(『後鳥羽院御集』六二七)

二四 梅が香をさそひもはてず木の本に誰がため残す嵐なるらむ

【合点】 良基

【詞書】 二三番歌「梅風」題を受ける。

【口語訳】 梅の香りをすっかり運んでしまわない。いったい誰のために嵐は木の根元に残すのだろう。

【語釈】 ●さそひもはてず―「さそふ」は持ち去る。「はつ」は補助動詞で「すっかりする」の意。「ず」は打消の助動詞の終止形。二句切れ。嵐が梅の香をすっかり運ばない、の意。●木の本―木の根もと。

【参考】 「風だにもさそひもはてぬ一枝の花をばいかがをりてかへらむ」（『風雅集』春下・二六〇・「花の一枝散り残れるを、人のそれをりて、といひければよめる」・道因法師）。

山路梅

二五 つま木とるしづがかへさの袖までも梅が香ふかし山の下道

【合点】 為重

【詞書】 「山路の梅」。「山路梅花」という四文字題で藤川百首題にも見える。その題意は『初学一葉』に「山路は自ら山路を行く躰なり。山類の言葉をまづ思ひよすべし。梅は取りわき句を賞する物なれば、幾度も其の心を詠ずべし。（略）」とある。

【口語訳】 山住の人が小枝を拾う、その帰り道の袖までも梅の香りが深く香っている、山の花陰にある道では。

【語釈】 ●つま木―薪をするために使う小枝。●しづがかへさ―「しづ」は木こりなど山の仕事で生計を立てている人。「かへさ」は帰り道。ここでは薪を拾って帰る、その帰り道。●山の下道―「下道」は物の影になつて

通じている道のこと。

【参考】「色も香もやすらふ袖にうつりけり山かげてれる梅の下みち」(『伏見院御集』一七七八・「路梅」)

庭梅

二六 梅が香をしる人住まぬこの宿とほかにやさそふ庭の春風

【合点】 善成

【詞書】「庭の梅」。『千首』題。

【口語訳】梅の香りの素晴らしさを知っている人は住んでいない、この宿だよと他の人を誘う庭の春風よ。

【語釈】●しる人住まぬ―【参考】友則歌を踏まえた表現。【補説】参照。●庭の春風―「あかなくのほひをちらす梅がえの花にいとほぬ庭の春風」(『玉葉集』春上・七八・「庭梅といふことを」・亀山院)

【参考】「君ならで誰にか見せむ梅花色をもかをもしる人ぞしる」(『古今集』春上・三八・「梅の花を折りて人におくりける」・紀友則)

【補説】梅花の素晴らしさをよくよく理解している人は少なく、あなた以外に風流な人はいないとする友則歌(参考・片桐注)を踏まえ、「梅が香をしる人住まぬ」と詠んだ。

二七 よそにとは風もさそはず吹くたびに小簾のひまもる軒の梅が香

【合点】 為遠

【詞書】二六番歌「庭梅」題を受ける。

【口語訳】他の場所へとは風も誘わない。吹くたびに小簾の隙間から漏れてくる軒近くに植えられている梅の香りは。

【語釈】●風もさそはず―「ず」は打消の助動詞の終止形。二句切れ。●小簾のひまもる―「小簾」は御簾のこと。●軒―軒端近くの、の意で題の「庭」を表す。

【参考】「雨はるる風はをりをり吹きいれてこすのまにほふ軒の梅がえ」（『風雅集』春上・八八・永福門院内侍）

紅梅

二八 袖ふれてうつしやせまし くれなゐ 紅のこぞめの梅の色もにほひも

【合点】善成

【詞書】「紅梅」。永久百首題。

【口語訳】袖を触れて、移してしまおうかしら。紅に色濃く染めた梅の色も香りも。

【語釈】●うつせやせまし―「や」は疑問の意の係助詞。「まし」は行動を起こすか思い迷う気持ちを表す。係り結びで連体形。二句切れ。●こぞめ―色濃く染めること。また、その染めたもの。濃染め。「けふも又人もとほでや紅のこぞめの梅の花の盛りを」（『続古今集』春上・六〇・宗尊親王）。

【参考】「紅のこぞめの梅の花のえはさくもさかぬも色に出でつつ」（『新後拾遺集』春上・四八・読人しらず）

春雨

二九 春雨の空をかすむとながむればふる音しもぞのどけかりける

【合点】 為重

【詞書】「春雨」。堀河百首題。『為重朝臣詠草』（二〇）康暦二年正月十七日「当座三十首」出題。

【口語訳】春雨の降る空を霞んでいるなあと物思いにふけり眺めていると、その降る音はかえって穏やかなものに聞こえるよ。

【語釈】●ながむ―「眺（め）」に「長（雨）」を響かせるか。●ふる―「降る」に「経る」を響かせるか。●音しもぞ―「もぞ」は危惧の意となるが、「しもぞ」となるとその意は表さない。ここでは雨の音がむしろのんびりとしたものとなる、の意。

【参考】「春雨のさはにふるごとおともなく人にしられてぬるる袖かな」（『玉葉集』恋一・一二六八・小野小町）

三〇 春雨のふるとなき世を思ひわび心づからにぬらす袖かな

【合点】 為重

【詞書】二九番歌「春雨」題を受ける。

【口語訳】春雨が降ると私の死後を思い悲しみ、自ら袖を濡らすことですよ。

【語釈】●ふる―「（春雨が）降る」に「（年月が）経る」を響かせ、年月が経ち私が死んだら、と二句目に掛かるか。●心づからに―自分の心から、自分の意志で、という意。「春風は花のあたりをよきて吹け心づからやうつろふと見む」（『古今集』春下・八五・藤原好風）。

【参考】「春雨に涙ふるまで惜しむらんはかなき世とて散りゆく花を」（『露色随詠集』六一八）

柳

三一 いとどしく木の芽はる風日数へてなびきぞまさる青柳の糸

【合点】 為遠・花町

【詞書】「柳」。堀河百首題。

【口語訳】 いっそう甚だしく木の芽を膨らませる春風が吹く日数が重なり、さらになびいている、青柳の糸は。

【語釈】 ●木の芽はる風―「はる」は「木の芽を」張る」と「春（風）」とを掛ける。「帰る雁雲ちにまどふ声すなり霞ふきとけこのめはる風」（『後撰集』春上・六〇）。 ●なびきぞまさる―係り結び。青柳の糸は春風に吹かれていっそうなびいている、の意。

【参考】「春風のかすみ吹きとく絶え間より乱れてなびく青柳の糸」（『新古今集』春上・七三・殷富門院大輔）

三二 青柳の縹の糸のなびかずはのどけき風のなにに吹かまし

【合点】 为重

【詞書】 三一番歌「柳」題を受ける。

【口語訳】 青柳の縹色の糸がもしなびかないならば、穏やかな風は何に吹くのだろう、いや何にも吹くものがない。

【語釈】 ●縹の糸―縹色の糸。青柳をたとえていう。『催馬楽』（浅緑）に「浅緑恋縹染めかけたりとも見るまで

に玉光る下光る新京朱雀のしだり柳」とある。●なびかずは―「ず」は打消の助動詞の連用形。「は」は係助詞。打消の仮定条件となり「なびかなかったならば」の意。

【参考】「青柳の花田の糸をよりあはせてたえずも鳴くか鶯の声」(『拾遺集』春・三四・凡河内躬恒)、「雨はれて露の玉ぬく青柳のはなだの糸に春風ぞ吹く」(『新後拾遺集』春上・五九・「延文百首歌」に・足利尊氏)

柳露

三三 佐保姫さほひめのこれやかざしの玉かづら朝露かかる春の青柳

【合点】 為重

【詞書】「柳の露」。『千首』題。

【口語訳】佐保姫のこれが挿頭の玉鬘なのだなあ。朝露がかかる春の青柳を見てそのように思います。

【語釈】●これやかざしの―『為尹千首』に「初瀬女のこれやかざしのをりのこしおよぶばかりは見えぬ花かな」(春・一四三)と見える。

【参考】「あさみどり春のすがたにさほひめはしだり柳のかづらしてけり」(『堀河百首』一一九・藤原仲実)

水辺岸柳

三四 龍田河あさせの岸きしに寄る波なみも深きみどりや青柳の影ふか

【合点】 善成

【詞書】「水辺の岸の柳」。『経氏集』の他、未見。

【口語訳】 龍田川は浅瀬の岸に寄せる波も深き緑になっているよ、青柳を射す光が反射して。

【語釈】 ● 龍田河―「龍田」は一四番歌参照。「龍（田）」に「立つ」を響かせ、「波」の縁語。● あさせの岸―「岸」「寄る」「波」は縁語。上句の「浅瀬」と下句の「深き（みどり）」とが対になる。

【参考】 「夏衣たつた川原の柳蔭すずみに来つつならす頃かな」（『後拾遺集』夏・二二〇・曾根好忠）、「春風のわたればいとど乱れけり龍田河原の青柳のかげ」（『政範集』一〇二・「河柳」）。

帰雁

三五 帰る雁^{かり}いかでか雪のふるさとに都^{みやこ}の春^{おも}を思ひかふらむ

【合点】 善成・耕雲

【詞書】 「帰雁」。堀河百首題。『為重朝臣詠草』（四二）「康暦二年三月十八日道場月次会、同年卯月・当座五十首監相出題」。

【口語訳】 帰る雁はどのようにして雪の降る故郷で都の春を気持ちの切り替えをするのだろうか。

【語釈】 ● 雪のふるさと―「ふる」に「降る」と「故（郷）」とを掛ける。● 思ひかふ―思いを改める。ここでは都から雪の降る故郷へ移り、都で過ごした思い出を名残惜しく思うことなく、気持ちを改めるのだろうかと思ねる。

【参考】 「逢ふことをたのむの雁のいかなれば思ひかへりて雲がくるらん」（『清輔集』二七九・「契後隠恋」）

三六 春の雁秋来し旅もほどなきに又たちかへる音をや鳴（く）らむ

【合点】 為重

【詞書】 三五番歌「帰雁」題を受ける。

【口語訳】 春の帰雁が秋にやって来た旅からいく程も立たぬうちにまた帰ってゆく、その鳴き声を聞くのだろうか。

【語釈】 ●秋来し旅―雁が秋になって北方から最初にやってきた、その旅。●音をや鳴くらむ―「音」は雁の鳴き声。「や」は疑問の係助詞。「らむ」は推量の助動詞の連体形。

【参考】 「かへる雁秋こし数は知らねども寢覚めの空に声ぞすくなき」〔風雅集〕春中・一三五・藤原家隆

三七 跡したふ友とだに知れ春の雁連れてこし路の数ならずとも

【合点】 為遠・為重・善成・耕雲

【詞書】 三五番歌からの「帰雁」題を受ける。

【口語訳】 せめて跡を慕う友とだけでも知っておいておくれ。春の雁は、秋に連れて来たその数に足らなくても。

【語釈】 ●跡したふ―先に行く者の後を慕って追う。亡き人の跡を慕うという哀傷歌に用例を見る。●友とだに知れ―「知れ」は「知る」の命令形。二句切れ。●連れてこし路―「こし路」に「来し路」と「越路」とを掛ける。【参考】 古今歌の左注「この歌は、ある人、男女もろともに人の国へまかりけり、男まかりいたりてすなはち身まかりにければ、女一人京へ帰りける道に帰る雁の鳴きけるを聞きてよめるとなむいふ」とあることを踏まえ、秋に連れ立ってやってきた雁の中にはこの土地で亡くなったものもいるだろうから、来た時の数には足らず

悲しく鳴いているという意を込めている。

【参考】「北へ行く雁ぞなくなる連れてこし数は足らでぞかへるべらなる」（『古今集』 羈旅・四二二・読人しらず）

三八 かへる雁思ひ連ぬること問はむ行（く）方もなき身をいかにせん

【合点】 善成

【詞書】 三五番歌からの「帰雁」題を受ける。

【口語訳】 帰る雁が連なって飛びながら思い連ねていることを尋ねてみたい。行き着く先もない我が身をどのようしたらよいものなのか。

【語釈】 ● 思ひつらぬる―さまざまなことを次々と考える。【参考】 躬恒歌を踏まえた表現でつらい憂きことを思い連ねている。「つらぬる」に「（雁が）連ぬる」を掛ける。● こと問はむ―意志の助動詞「む」の終止形。三句切れ。

【参考】 「うきことを思ひつらねて雁がねの鳴きこそわたれ秋のよなよな」（『古今集』 秋上・二二三・凡河内躬恒）

蕨

三九 冬枯れの野辺のおどろの下蕨もえていつより春を待ちけむ

【合点】 花町

【詞書】 「蕨」。堀河百首題として「早蕨」がある。

【口語訳】 冬枯れの野辺の乱れ茂った下蕨がもえ出ていつから春を待っていたのだろうか。

【語釈】 ●おどろの下蕨―「下蕨」は春になって、冬枯れの草の中に小さく生え出た蕨のこと。それが乱れ生い茂っている様子。 ●春を待ちけむ―「けむ」は過去推量の助動詞。

【参考】「深山木のかげのの下の下蕨もえいづれども知る人もなし」（『堀河百首』春・「早蕨」・一三九・藤原基俊）

遊糸

四〇 何にしもかかるとはなきいとゆふのあるかなきかのわが身なりけり

【合点】 善成

【詞書】「遊糸」。永久百首題。

【口語訳】 何かに限ってかかるというわけではない糸遊のようないるのかいないのか分からないような我が身なのですよ。

【語釈】 ●何にしも―「しも」は「なき」という否定語をとまって、その焦点が「何かに限るというわけではない」ことを示す。 ●かかる―糸の縁語。 ●いとゆふ―かげろう。 ●あるかなきか―【参考】歌を踏えた表現。

【参考】「霞はれみどりの空ものどけくてあるかなきかに遊ぶいとゆふ」（『和漢朗詠集』下・雲・四一五）

春月

四一 出で入（る）もいづれ境と山隠す霞をわけて月の行（く）らん

【合点】 善成・耕雲

【詞書】「春の月」。

【口語訳】出たり入ったりするのどこを境として山を隠しているのか。恨めしい霞を分けて春の月が行くのでしよう。

【語釈】●出で入るも―月が出たり、入ったりする。●いづれ境と山隠す―【参考】古今歌で春になって東国から都にやってくる途中、都を隠す霞を恨めしく思うとするその気持ちを踏まえ、春の月が霞によって出で入る山の境を隠されていることに対してもどかしく思うと表現。

【参考】本歌「山かくす春の霞ぞうらめしきいづれ都の境なるらむ」（『古今集』羈旅・四二三・乙）

待花

四二 しばしただ消えせぬ雪を花と見て待つ日も遅き山桜かな

【合点】花町

【詞書】「待つ花」。『千首』題。

【口語訳】少しの間ただ消えることのない雪を花だと思って見て待つ日も遅い山桜なのだ。

【語釈】●待つ日も遅き―【参考】後撰集の贈答歌の返歌を踏まえた表現。【補説】参照。

【参考】「山がくれ消えせぬ雪のわびしきは君まつのはにかかりてぞ降る」（『後撰集』恋六・一〇七二・「心ざし侍る女宮仕へし侍りければ、逢ふこと難くて侍りけるに、雪の降るにつかはしける」・（読人しらず）・「我が恋ひし君があたりをはなれねば降る白雪も空に消ゆらん」、一〇七三・「返し」・読人しらず）

【補説】『後撰集』一〇七三番歌の山の陰で消えずに残っている雪のわびしさと相手を待っているわびしさという恋の要素を取り込み、当該歌では二句目と四句目で花が咲くのを待つとよみ、題の本意を表している。

四三 咲かぬ間はさていつまでぞ花見はなみんといそぎし春ぞなかば過ぎぬする

【合点】 為遠

【詞書】 四二番歌「待花」題を受ける。

【口語訳】 咲かない間はそれにしてもいつまででしょうか。花を見ようと急いだ春は半ばを過ぎてしまつたよ。

【語釈】 ●さて―感動詞。それにしても、まあ。●いつまでぞ―いつまで咲かないのでしょうか。ここで切れ、二句切れ。●花見んと―「ん（む）」は意志の助動詞。

【参考】 「植ゑし時花見むとしも思はぬにさき散る見れば齡老いにけり」〔後撰集〕春中・四七・藤原扶幹

尋花

四四 桜咲く花のところは知らねどもまづわけ入らんみ吉野よしのの山

【合点】 為遠

【詞書】 「尋ぬる花」。『千首』題。『為重朝臣詠草』（四六）康暦二年三月（十八日）当座三十首に出題。

【口語訳】 桜が咲くその花の場所は知らないけれど、ともかくまずは分け入ってみよう、み吉野の山へ。

【語釈】 ●み吉野の山―大和国の歌枕。現在の奈良県吉野郡の山。

【参考】 「桜咲く花の所の吉野山深くや春に契りおきけん」〔長綱集〕八三

初花

四五 咲きそむる一もとゆるへになべて世よの木ずる花ぞいとどつれなき

【合点】 善成

【詞書】「初花」。はつ『千首』題。

【口語訳】 咲き始めた一本の桜があるが故にすべての世の梢の花は一段とつれないものだ。

【語釈】 ●花ぞいとどつれなき―「いとど」はいよいよ、ますますの意。「つれなき」は係助詞「ぞ」を受けて係り結びとなり連体形。「散過ぐる比しも花にのこる月いとどつれなき在明の空」(『草根集』一一九五・「曉花」)などの用例がある。

【参考】「咲きそむる宿の桜の一もとよ春のけしきに秋ぞ知らるる」(『風雅集』釈教・二〇七八・永福門院内侍)

四六 一木より家路ちわす忘るる心こころにも花のところぞあまたゆかしき

【合点】 良基

【詞書】 四五番歌「初花」題を受ける。

【口語訳】 一本の木のために家路を忘れる心にも花の咲いている場所は多く心が惹かれる。

【語釈】 ●一木より―「より」はある物の働きかけが起点となっていることを表す。●家路―我が家に帰る路。

●あまたゆかしき―「あまた」は多くの。「ゆかしき」は係助詞「ぞ」を受けて係り結びとなり連体形。

【参考】「この里に旅寝しぬべし桜花ちりのまがひに家路忘れて」(『古今集』春下・七二・読人しらず)

【補説】 一本の桜の木のために家路は忘れてしまうが、桜が咲いている多くの場所には心が惹かれる、とよんだ。

花の歌の中に

四七 桜狩りさこそ家路の忘れめ宿をもそこ言はぬころかな

【合点】 為重・耕雲

【詞書】 「花の歌を詠んだ中の一首」。

【口語訳】 桜狩りに出かけると家路を忘れるだろう。宿はそこですよ今は言われないな。

【語釈】 ●桜狩り―観桜。花見。●さこそ―副詞「さ」に強めの指示を表す係助詞「こそ」。桜狩に出かけると当然、家路を忘れてしまうだろうという心理を肯定する気持ちを表す。●忘れめ―「忘る」の未然形に自発の意の「る」に推量の意の「む」の已然形。係助詞「こそ」を受けて係り結びとなり、三句切れ。●言はぬころかな―「ころ」は今はくする、の意。

【参考】 四六番歌【参考】 参照。

【補説】 古今集七二番歌の散り敷く桜花のために家路を忘れて旅寝をすることを踏まえて、当該歌は旅寝の宿はそこだと言われないとする。

四八 かつ咲くと見えし木ずゑもわかぬまで花になりぬるみ吉野の山

【合点】 善成

【詞書】 四七番歌「花の歌の中に」の詞書を受けている歌の内容である。

【口語訳】 すぐに咲くと思った梢も分らなくなるほど花が咲き誇っているみ吉野の山だよ。

【語釈】 ●かつ―たちまち。すぐに。●花になりぬる―「なりぬる」はラ行四段動詞「なる」の連用形に状態が

発生する意の助動詞「ぬ」の連体形。桜花が吉野山全体で満開となったことを表現している。●み吉野の山―
四四番歌参照。

【参考】「かへるさは道まよふとも山桜かつ咲く峰をなほやたづねむ」（『新玉津島社歌合』「尋花」・藤原実夏）

遠山花

四九 山^{とを}遠み雲と花とをいくたびかわかで心の行（き）かへるらむ

【合点】 善成

【詞書】「遠山の花」。『為重朝臣詠草』（二三三）康暦二年八月「十六日、禁裏当座三十首、大樹参上、同夜九打程に、別当并万里小路黄門可参之由送状候間、則参上」で出題。

【口語訳】山が遠いので、雲と花とを幾度も行くものの分からなくて心が行き来するのだろう。

【語釈】●山遠み―「遠み」は「遠し」のミ語法。●いくたびか―「幾」と「行く」とを掛ける。「か」は係助詞。●わかで―分別しないで。●心の行きかへるらむ―現在推量の意を表す「らむ」の連体形。係り結び。

【参考】「山高み雲るに見ゆる桜花心の行きてをらぬ日ぞなき」（『古今集』賀・三五八）

【補説】【参考】古今歌で実際には山が高いので雲の辺りにある桜を折りには行けないが心だけが花を折りに行っているということを踏まえ、当該歌では行ってみたものの雲か花か分からずに心が行き来しているとする。

名所花

五〇 咲き続く尾上も八重の花ざかり山の名に立つ雲かとぞみる

【合点】 善成

【詞書】 「名所の花」。

【口語訳】 咲き続く尾上でも八重の花が盛りを迎えている。山の評判と同様に雲が立っているのかと思った。

【語釈】 ●尾上―山の頂。ここでは【参考】に挙げた匡房の歌を念頭に置き、題にある名所として高砂を想起させる。【参考】匡房歌では一般名詞として詠まれているが、ここでの「高砂」は歌題に「名所」とあることから、播磨国の歌枕。現在の兵庫県高砂市の辺り。

【参考】「高砂の尾上の桜咲きにけり外山の霞立たずもあらなん」（『後拾遺集』春上・一二〇・大江匡房）

遠望山花

五一 龍田河花の錦も中絶えて一むらなびく朝霞かな

【合点】 善成

【詞書】 「山花を遠く望む」。藤川百首題にも見える。題意は『初学一葉』に「此の題の大意、遠山の花をみやりたる心なり。何も花の見わきがたき事をよめり。雲にまがひ、霞をかこち、かをりくる風のつてを思へる心など、取りぐにおほかるべし。」とある。

【口語訳】 龍田川は花の錦も途中で絶えて、一群だけ靡いているのは朝霞なのだな。

【語釈】 ●龍田河―「龍田」は一四番歌参照。題の「山」ではなく「河」としたのは【参考】道真歌の「紅葉の

錦」を踏まえているため。●花の錦―美しく咲く花を錦に見立てた。秋の紅葉だけではなく、春の桜も龍田川に散り敷いていることをいう。●中絶えて―霞によって花の錦が途中で切れたように見える。●ひとむら―霞がひとかたまりになっている様子を表す。●朝霞―題の「遠望」を婉曲に表現。「まはして」心を詠んでいる。

【参考】「このたびはぬさもとりあへずたむけ山紅葉の錦神のまにまに」(『古今集』羈旅・四二〇・菅原道真)

山路花

五二 山桜^{やまざくら}見^みつつ我^わが来^こし木^きずゑさへ^又またしら雲^{うみ}になにまが^{まが}ふらむ

【合点】 為遠・耕雲

【詞書】 「山路の花」。

【口語訳】 山桜を折ることもできず見るだけで帰って来たあの梢さえどうしてまた白雲に紛れているのだろう。

【語釈】 ●見つつ我が来し―【参考】貫之歌の二・三句目を摂取。●しら雲―「しら」に「白(雲)」と「知ら(ず)」とを掛ける。

【参考】「山高み見つつ我が来し桜花風は心にまかすべらなり」(『古今集』春上・八七・紀貫之)

見花

五三 なれゆくを友とは花^{はな}も思^{おも}ふらむそむる心^{こころ}の色見えずとも

【合点】 善成

【詞書】 「見る花」。『千首』題。

【口語訳】たびたび眺めて打ち解けてゆくので、友だとも花も思うのだろう。深く思うその心の色は見えないけれど。

【語釈】●なれゆくを―花を見慣れているので。桜を擬人化しているので、打ち解けて、と訳した。●思ふらむ―「らむ」は現在推量の助動詞で終止形。ここで切れ、三句切れ。●そむる心の色―「心の色」は深く思い込んでいる心の様子。「そむる」は「染む」で「色」の縁語。

【参考】「年ごとにそむる心のしるしあらばいかなる色に花のさかまし」（『新後拾遺集』春上・九一・登蓮法師）

野花留人

五四 み吉野をいまさら宿^{やど}とたのむ身は花にやとまる心なるらむ

【合点】善成

【詞書】「野の花人を留む」。藤川百首題にも見える。題意は『初学一葉』に「此の題秋にも出たれど、こゝにては勿論春なり。花のおもしろきにめで、かへりもやらぬ心なり。或は終日花にかり暮して帰るさを忘れたる心をいひ、又はこの本に日数をかさねたる心をも読むべし。」とある。

【口語訳】み吉野を今になってまた宿と頼みにする我が身は花に留まる気持ちなのだろうかしら。

【語釈】●み吉野―大和国の歌枕。四四番歌参照。●いまさら―改めて今、の意。●宿―「とまる」は縁語。●下句―「にや」は疑問を表す。「らむ」は現在推量の意で、「や」を受けて連体形。

【参考】「花ゆゑにいまさら訪はば我が家とたのむよしのも道やたどらむ」（『新玉津島社歌合』五十番・「尋花」・右・頼阿）

海辺花

五五 影うつす磯山桜咲きしより波の花にも春は見えつつ、

【合点】 善成・耕雲

【詞書】 「海辺の花」。

【口語訳】 海に影を映す磯辺近くの山にある桜が咲くやいなや、波にも花が映って春の景気が見えることだ。

【語釈】 ●磯山桜―磯辺にある山に咲く桜。 ●咲きしより―「し」は過去の事実を表す助動詞「き」の連体形に「より」が接続し即時の意味を表す。咲くとすぐに。 ●波の花にも春は見えつつ―白い波頭を花に見立てた表現に波に山桜の影が映る様子を重ねる。

【参考】 「海士の住む磯山桜散る花の波かけ衣袖匂ふらし」（『続草庵集』九四・「御子左入道大納言、蔡花園に歌よまれし時、海辺花」）、「志賀の浦の波の花こそ影うつす比良の高嶺の桜なりけれ」（『新葉集』春下・九〇・藤原光任）

河辺花

五六 吉野河木ずゑの花の陰なれや流れもやらぬ水のしら波

【合点】 為遠・耕雲

【詞書】 「河辺の花」。

【口語訳】 吉野川では梢の花の陰なのだろうか。流れが滞って水の白波が立っている。

【語釈】 ●吉野河―大和国の歌枕。四四番歌参照。 ●陰なれや―「や」は疑問の意。三句切れ。 ●流れもやらぬ―「遣る」は（水を）流れ行かせる、の意。

【参考】「小初瀬の花のさかりやみな河峰よりおつる水の白波」（『新後拾遺集』春下・八三・藤原清輔）、「桜花咲きぬる比は山ながら石間行くてふ水の白波」（『拾遺愚草』一三二三）

【補説】「河辺花」題は『草庵集』（二七〇）にも見え、続く配列は「折花」（二七一～二七四）となり、当歌集と同じ。

折花

五七 逢（ふ）人は問へど答へずかへるさにたをりてかざす花のところを

【合点】善成

【詞書】「折る花」。『千首』題。

【口語訳】すれ違って逢う人は尋ねてみても答えてくれません。帰り際に手折ってかざす花の咲く場所を。

【語釈】●逢ふ人は―花見に行く道すがらすれ違う人は。●問へど答へず―二句切れ。「山吹の花色衣主や誰問へど答へずくちなしにして」（『古今集』雑体・一〇二二・素性法師）。

【参考】「いしばしる滝なくもがな桜花たをりてもこむ見ぬ人のため」（『古今集』春上・五四・読人しらず）

惜花

五八 春を経て待つも惜しむもかこつ身を憂しとや花の思ひしるらむ

【合点】善成

【詞書】「惜しむ花」。『千首』題。

【口語訳】春を過すごして、花が咲くことを待っているのも、花が散ることを惜しむのも、どちらも嘆くわが身を憂うれっているのだと花が思い知るのだろうか。

【語釈】●憂しとや花の思ひしるらむ―「や」は疑問の意の係助詞を受けて「らむ」は現在推量の助動詞の連体形で係り結び。

【参考】「年を経て待つも惜しむも山桜花に心をつくすなりけり」（『続拾遺集』春下・九一・西行法師）、「春雨の降るは涙か桜花散るを惜しまぬ人しなければ」（『古今集』春下・八八・大伴黒主）

【補説】西行歌へのオマージュ。加えて【参考】古今歌で花が散ることを惜しむ人はいないと一般化している点をわが身のこととしている。

落花

五九 ななごりとは思おもふものから散ちる花はなにたぐふもつらきわが心かな

【合点】善成

【詞書】「落花」。永久百首題。『千首』題。

【口語訳】花が咲いた余韻だと思ふそばから散る花に寄り添うのもつらい私の心であるよ。

【語釈】●なごり―名残に「波残り」を響かせ、【参考】貫之歌を想起させるか。●たぐふ―一緒に。添う。「散る花」に「たぐふ」とする【参考】躬恒歌をも踏まえるか。

【参考】「桜花散りぬる風の名残には水なき空に浪ぞ立ちける」（『古今集』春下・八九・紀貫之）、「とどむべき物とはなしにはかなくも散る花ごとにたぐふ心か」（『古今集』春下・一三二・凡河内躬恒）

花の歌として

六〇 水馴れ竿散り交ふ花のしら浪を空にもわくる宇治の川舟

【合点】 良基

【詞書】 「花の歌を詠みました」。

【口語訳】 水馴れ棹をあやつって散り交う花でできた白波を空にも分ける宇治の川舟。

【語釈】 ●水馴れ竿——『能因歌枕』には「みなれさをとは、舟さすさを、云」、『隆源口伝』には「水馴竿、ぬれたる棹をいふ。四条大納言舟さす棹をいふ、イ本云、水に馴れたる船棹をいふ」とある。●空にもわくる——「わくる」に「(白波を) 分け行く(川舟)」と「(川舟が白波を) 分けて(舞い散る桜とする)」とを掛ける。

【参考】 「水馴れ竿岩間に波はちかへどもたゆまずのぼる宇治の河舟」(『続千載集』釈教・九六二・藤原定家)、「風をいたみ山こぐ我は舟なれや花の白浪わけてきつれば」(『拾玉集』「花月百首」・一三三四)

【補説】 宇治川に舞い散る花の様子を、棹さしながら白波を立てて流れる川を下る舟がしぶきを上げて進む様子に重ね合わせた。

曉庭落花

六一 かすみゆく在曙の月はそれとだにまがはぬ庭の花の雪かな

【合点】 為遠・善成

【詞書】 「曉の庭の落花」。藤川百首題にも見える。題意は『初学一葉』に「晨明の月のをしきをいひ、寢覚の事を詠ずれば、自ら曉の心になれり。散る花の名残をかこつに取りては風をうらみこと、ふ人の稀になり行く風情

などをいふべし。（略）」とある。

【口語訳】霞んでゆく有明の月はそれだとさえ紛うことのない庭の花が舞い散り雪のように見える。

【語釈】●かすみゆく在曙の月―初二句で題の「暁」を表している。

【参考】「あさぼらけ有明の月と見るまでに吉野の里に降れる白雪」（『古今集』冬・三三二・坂上是則）

【補説】月の光を白雪に見立て、その雪を落花に見立てる。同題の類歌に「庭白く散りしく花の雪の上にかすま
でうつる在明の月」（『菊葉集』二三二・従三位政子）がある。

庭落花

六二 枝にしもさのみしたはで桜花^{さくら}散^ちり敷^しく庭をさかりとやみむ

【合点】為重

【詞書】「庭の落花」。

【口語訳】枝に咲いた桜ばかりを慕うことなく、桜花は、庭に散り敷いているのを盛りと見ようか。

【語釈】●枝にしもさのみしたはで―「にしも」打消表現」で強調の意を表す。「枝に（咲く桜）だけを慕わずに」の意。

【参考】「散る花を又吹きさそふ春風に庭をさかりとみる程もなし」（『新後撰集』春下・一三八・「入道前関白家にて、庭落花といへる心を読み侍りける」・京極為兼）

堇

六三 庭の面は道もなきまで咲きにけり誰この宿にすみれ摘むらん

【合点】 良基

【詞書】「堇」。堀河百首題に「堇菜」がある。

【口語訳】荒れ果てた庭の面には通る道もないほどに咲いたのだな。誰がこの宿でスマレを摘むのだろう。

【語釈】●すみれ―「すみ」に「住み」を響かせる。

【参考】「いその神古りにし人を尋ねれば荒れたる宿にすみれ摘みけり」(『新古今集』雑中・一六八四・「西院辺に、はやう相知れりける人を尋ね侍りけるに、すみれ摘みける女、知らぬよし申しければ、よみ侍りける」・能因法師)

【補説】【参考】の能因歌などを踏まえて荒れ果てた宿の庭に咲くスマレの花を詠んだ。

百首の歌よみ侍りしに

六四 咲きしより立ちも立たずもしら波のかたえにかかるおふの浦なし

【合点】 良基

【詞書】「百首の歌を詠みました中に」。「百首歌」の詠歌年次は不明。

【口語訳】花が咲いてから立ったり立たなかったりすることも分からない白波が片方の枝にかかっているおふの浦には梨が生っているよ。

【語釈】●しら波―「白(波)」と「知ら(ず)」とを掛ける。●かたえ―片方の枝。●おふの浦―『袖中抄』(第十六「をふの浦」)には【参考】古今集歌の注として「をふの浦は伊勢国にあり。斎宮御庄猷梨所也」とある。

●なし——「梨」に「（ない）の意の）なし」を響かせるか。

【参考】「おふの浦に片枝さしおほひなる梨のなりもならずもねて語らはむ」（『古今集』東歌・一〇九九・「伊勢歌」）

【補説】【参考】歌の「なりもならずも」という表現を踏まえ、「立ちも立たずも」とし白く咲く梨の花を波に見立てて詠んでいる。

蛙

六五 浮き草のさそはれわたる水の面におのが音たえず鳴くかはづかな

【合点】善成

【詞書】「蛙」。永久百首題。『千首』題。

【口語訳】浮き草に誘われ続ける水面に自身の鳴き声を絶えることなく鳴き続ける蛙なのだ。

【語釈】●浮き草——水面に浮かび根が固定されていない草。●かはづ——『和歌作式』には「若詠蛙時 かはづと云」とある。

【参考】「みがくれてすだくかはづのもろ声にさわぎぞわたる池の浮き草」（『後拾遺集』春下・一五九・良暹法師）

【補説】【参考】に挙げた良暹法師の歌では蛙の鳴く声で浮き草が揺れるとする。当該歌では浮き草の水の流れに揺れる様子が蛙を誘っていて、それに促されて蛙が鳴くとする。

里款冬

六六 山吹ぞあやなく咲ける花見むとううべき賤が垣根ならぬに

【合点】 善成

【詞書】 「里の款冬」。『千首』題。

【口語訳】 山吹は甲斐もなく咲いている。花を見ようと（あの人を訪れると思って）植えたであろう、貧しい者の家の垣根ということではないのに。

【語釈】 ●山吹ぞあやなく咲ける―「ぞ」は係助詞。「あやなし」はここでは咲く意味がないの意。「咲ける」係り結びで二句切れ。●花見むと―【参考】 古今歌を踏まえるので、花を見ようとしたのは古今歌に見える「君」と捉えた。●ううべき―底本「とふべき」の「と」をミセケチ、その右傍に「う」と記され「うふ」とある。「植うべき」。

【参考】 「山吹はあやなさきそ花見むとうゑけむ君がこよひこなくに」（『古今集』春下・一二三・読人しらず）
 【補説】 【参考】 古今歌で、山吹の花を見ようと植えた人が今宵は来ないから甲斐がないとすることを踏まえ、初句で「山吹ぞ」と強調する。

藤花随風

六七 咲く藤のなびくを見ればうづもる松にも風ぞなほのこりける

【合点】 為遠

【詞書】 「藤花風に随ふ」。藤川百首題にも見える。題意は『初学一葉』に「藤は春の末に咲くなれば、暮行く春

のけしきをいひ、池のおも松にかゝれる様を読むべし。紫の雲にまがへてもよめり。風に随ふの心よくいひおほせ侍らん事、肝要なるべし。」とある。

【口語訳】花房がこぼれんばかりに咲いている藤の花がふさふさとなびいている様子を見ると、埋もれている松にも風が変わらずに残っているのだな。

【語釈】●うづもるる松―満開に咲き誇る藤の花に松が埋もれている。●風ぞなほのこりける―係助詞「ぞ」と詠嘆の意の「けり」の連体形で係り結び。

【参考】「吹くからに松の藤波なびくなり春をば風にまかせざらん」（『新続古今集』春下・二〇〇・津守国冬）

暮春藤

六八 春ははやいくかもあらじまつ吹^ふけばかかれる藤の色ぞうつろふ

【合点】なし。

【詞書】「暮春の藤」。

【口語訳】春は早くも幾日も残ってはいまい。まず松に風が吹けばかかっている藤の花の色はうつろうことだ。

【語釈】●まつ吹けば―「まつ」は「松」で「まづ」を掛けるか。●かかれる藤の色―【参考】のように松に懸かった藤が詠まれる。

【参考】「紫の藤咲く松のこずゑにはもとのみどりも見えずぞありける」（『拾遺集』夏・八五・源順）

暮春

六九 とまらぬもよしやうき世のならひぞと思ひなぐさむ春の暮かな

【合点】 善成

【詞書】 「暮春」。

【口語訳】 とまらずに過ぎ去ってゆくのもよいであろう。これも憂き世の中の決まりだと思い慰める春の暮れだな。

【語釈】 ●とまらぬもよしや―【参考】 歌の二句目を踏まえ、時の流れを止めることができないことも受け止め、「よしや」と肯定的に捉えている。「や」は間投助詞。

【参考】 「待てといふにとまらぬものとしりながらしひてぞ惜しき春の別は」(『新古今集』春下・一七二・読人しらず)

三月尽

七〇 ゆく春をただなほざりに慕ひきてさらにおどろく今日の別れ路

【合点】 良基

【詞書】 「三月尽」。堀河百首題。

【口語訳】 過ぎ去ってゆく春をなんとなく慕ってきて、いまさらはつと気づいた今日が三月尽でお別れの日だよ。

【語釈】 ●さらに―春が過ぎ去っていくことが決定的となり、その事実に対して抵抗する気持ちを事新たにいうまでもないが。という意を込める。●今日の別れ路―『為尹千首』に「かひなしや心は春にそふとてもかへりみもせぬけふのわかれ路」(春・一九七・「惜三月尽」)と見える。

【参考】「ゆく方もしらぬ春とは知りながら心尽くしのけふにもあるかな」（『堀河百首』三〇五・藤原公実）

七一 花鳥^{とり}の別れ^{わか}にかねてならずは今日^{けふ}行く春^ゆをなほや慕^{した}はん

【合点】 為重・耕雲

【詞書】 七〇番歌「三月尽」題を受ける。

【口語訳】 花や鳥との別れにかねてからなじんでいなければ今日去りゆく春を変わずに慕ってしまうことですよ。

【語釈】 ●ならずは——「ならふ」は経験を積んでよく理解している。慣れる。「ず」は打消の助動詞の未然形。「は」は接続助詞。順接の仮定条件を表す。今まで経験していなければ、の意。先行例として「都にておぼつかなさならはらずは旅寝をいかに思ひやらまし」（『詞花集』別・一七二・民部内侍）がある。

【参考】「とどまらぬ別れのみかは花鳥の名残につけて惜しき春かな」（『玉葉集』春下・二七三・「暮山の心を」・平宗宣）

以下、『源経氏歌集』 四季部注釈稿（中）（下）に続く。

『無名抄』 原態系統本の本文について

——『無名抄』本文の再検証——

茅 原 雅 之

はじめに

鴨長明の歌論書『無名抄』の伝本は、その書写形態と本文の異同により、大きく二つの系統本（原態系統本と古本系統本）に分けられる。本稿では、この二つの系統本の間にどのような異同が生じているのかを、具体例をもとに検証していく。まずはこれら二系統への分岐が、『無名抄』の書式と本文の改編作業に端を発している様子を確かめながら、この二つの系統本の違いが、原形本と編集本との違いである様子を再確認する。これに続き、原態系統本と古本系統本との本文異同において、古本系統本がより注釈的な本文を有していること、また『無名抄』本来の記述と考えるには不審な点が多く見られる点について言及していく。二系統の間には、章段全体の文意が大きく異なる箇所や、長明の歌論が異なっている箇所などが見られる。この二系統の差異を明らかにすること、『無名抄』の本文がもつ問題点を明らかにし、『無名抄』伝本における原態系統本の意義を論じていく。

一、『無名抄』の伝本について

これまでの研究において、『無名抄』の伝本は全て同一系統本であると考えられてきた。⁽¹⁾しかし稿者が先の論稿⁽²⁾にて明らかにしたように、『無名抄』の伝本は章段と見出しの有無、またこれに連絡する本文の異同によって大きく二つの系統本に分けることができる。まず一方の古本系統本⁽³⁾は、本文の分割によって章段が設けられており、章段ごとに見出しを付した形態の本である。現存最古とされ、その書写が鎌倉期にまで遡るとされる東京国立博物館蔵梅沢記念館旧蔵本（一類本）や、同じく鎌倉期にまで遡る可能性をもつ天理図書館蔵呉氏旧蔵本（二類本）もこの系統の伝本であり、現存する伝本の大半がこの見出しを有する系統の伝本である。そしてもう一方の系統本は、章段という形式をとらず、また見出しを有さないかたちの伝本である。『無名抄』の原態に章段と見出しが無かったとする従来の説⁽⁴⁾にしたがうならば、この系統本は『無名抄』の古い形態を失うことなく伝えてくるものと考えられる。このような形態を備える伝本では、全文がほぼ詰め書きに記されており、改行を最小限にして地の文と和歌の区別もなされていない。章段に相当する区分点には朱書きの符号を付すものが多いが、多和文庫本のように区分点を有さない本もある。本稿ではこの系統の伝本を原態系統本と呼称することにし、管見の及ぶものに、林羅山旧蔵本・青山会蔵本・初雁文庫本・斎藤宗家旧蔵本・多和文庫蔵本の五本がある。⁽⁵⁾

二、『無名抄』本文に見られる系統の分岐

さて『無名抄』伝本において原態系統本が重要であるのは、単に書式が古い形態を伝えているからではなく、

見出しを有する系統本との間に多くの異同が見られ、その本文が『無名抄』の古い様子を伝えていゝらしいことにある。まずは『無名抄』前半の例をもとに、この二系統の間に生じている本文異同の様子を概観しておきたい。以下に、先の論稿⁽⁶⁾から用例の一部を再掲する。異同を持つグループごとに、便宜的に、林羅山旧蔵本⁽⁷⁾(以下、林本と略称)と同じ本文群をA型、梅沢記念館旧蔵本⁽⁸⁾(以下、梅沢本と略称)と同じ本文群をB型に分類した。

3段

隔海路論(以下、章段数および見出しは全て梅沢本に従う。また本文ナシの部位を「―」にて示す。)

(A型)

野を隔恋にも山をへたつる題にも(―)用やする

◎林羅山 青山 初雁 斎藤 多和 伏見(「恋にも山をへたつる題」にあたる箇所も欠文)

(B型)

野をへたつる恋にも山をへたつる題にもしは里をへたて河をへたてつるにもちみんとやする

◎梅沢 黒川 呉氏 天理 築瀬 蓬左 静嘉堂

4段

我与人

(A型)

おしむへき春をは人に契らせて空たのめにやならんとすらん

◎林羅山 青山 初雁 斎藤 多和 静嘉堂(異同注記あり「いとほせてイ」 天理(異同注記あり「いとほイ」

(B型)

をしむへきはるをは人にいとほせてそらたのめにやならんとすらむ

◎梅沢 黒川 呉氏 築瀬 蓬左 伏見

10段

コノモカノモノ論

(A型)

三条院和哥このませをはしましける時

◎林羅山 青山 初雁 斎藤 多和 蓬左(「三」右わきに別筆の貼り紙「二」)

(B型) 二条院和哥このませおはしましけるとき

◎梅沢 黒川 呉氏 天理 築瀬 静嘉堂（異同注記あり「三イ」） 伏見

11段
セミノヲカハノ事

(A型) 賀茂河の実名也……所をきらはすさ様に申て侍也

◎林羅山 青山 初雁 斎藤 多和 静嘉堂（異同注記あり「(をき) きて事をさためんとイ」）

(B型) かも河の異名なり……所おきてさやうに申て侍りしなり

◎梅沢 黒川 呉氏 天理 築瀬 蓬左 伏見

12段
千載集二予一首入ヲ悦事

(A型) (一) 筑州聞て ◎林羅山 青山 初雁 斎藤 多和

(B型) 故筑州きゝて ◎梅沢 黒川 呉氏 天理 築瀬 蓬左 静嘉堂 伏見

(A型) 誠おもひての給ふにこそさるらめ必冥加をはすへき人也

◎林羅山 青山 初雁 斎藤 多和（「さる」）

(B型) まことにおもひてのたまふことにこそさるにてはこのみちにならず冥加おはすへき人なり

◎梅沢 黒川 呉氏 天理 築瀬 蓬左 静嘉堂 伏見

(A型) みちをたゝせるには先心をうるはしく

◎林羅山 青山 初雁 斎藤 多和

(B型) 道をたうとふにはまつ心をうるはしく

◎梅沢 黒川 呉氏 天理 築瀬 蓬左 静嘉堂 伏見

右に『無名抄』前半の異同を一部に例示した。注目すべきは、これらの異同が、林本をはじめとする原態系統本（林・青・初・斎・多）と、梅沢本をはじめとする古本系伝本（梅・黒・呉）とに分かれて、画然と二分される様子である。⁽⁹⁾すなわちここに掲げた個々の異同は、長期に渡って書写が繰り返される中で別個に生じたものではなく、全てが見出しの有無によって系統が分かれたことと併せて生じたものである。つまりこれらは、章段と見出しの改編作業と併せて行われた、本文の校訂作業により生じた異同であったことがわかる。

『無名抄』の本文を二分するこの改編作業によって、『無名抄』伝本は、原態系統本A型本文（章段無し・見出し無し）と、古本系統本B型本文（章段有り・見出し有り）へと分岐したことになる。その書式に着目すれば原態系統本こそが『無名抄』の古い様子を伝えているものと推測されるが、果たして本文においても同じく古態を認め得るのだろうか。その異同の様子については改めて検証する必要があるだろう。

なおこの改編作業を検証する上で留意しておかねばならないことは、章段・見出し・本文におよぶこの書き換えが、同一の編集作業——あるいはほぼ同時期における一連の作業——でもって行われている点にある。すなわち、本稿にて検証するA型本文とB型本文の異同は、用例個々に前後関係が問われているのではなく、最終的には、原態系統本（章段なし・見出しなし・A型本文）と、古本系統本（章段あり・見出しあり・B型本文）の比較として、全体でもって前後が問われることになる。両者の違いは編集前と編集後の相違であり、右に例示した異同も、A型全体とB型全体の比較でもって前後関係が問われることになる。

三、注釈的な文章への書き換え

『無名抄』伝本を二分するこの本文の修正作業により、『無名抄』の本文はどのように書き換えられ、またその理解にどのような影響を及ぼすのであろうか。以下に、原態系統本の代表として林本を、古本系統本の代表として梅沢本を例にしながら、その先後関係を視野に入れながら、両系統本の相違と特色を明らかにしていく。

●林本 第30段箇所抜粋

(A型) 此比誰をか物知たる人にはつかまつりたるとはれしかは九条大納言伊道朝臣中院雅定などをこそは心にくき人と思て侍めりと申しかは

◎青山・初雁・斎藤・多和（何れも「九条大納言伊通朝臣中院大臣雅定」）

●梅沢本 第30段「三位基俊ノ弟子ニナル事」抜粋

(B型) この比たれをか物しりたる人にはつかまつりたるとはれしかは九条大納言伊通^{伊通}中院大臣^{雅定}なとをこそ心にくき人にはおもひて侍めれと申しかは

◎黒川 呉氏（九条大納言伊通^{伊通}中院大臣^{雅定}） 天理（「雅定大臣」の「大臣」にミセケチ）

静嘉堂（九条大納言伊通^{コレミチ}中院大臣^{マサコレ}） 築瀬 蓬左（九条大納言伊通^{伊通}中院大臣^{雅定}）

伏見（九条大納言伊通^{伊通}中院大臣^{雅定}）

第30段は、当時二十五歳であった俊成が基俊に弟子入りした際の話である。⁽¹⁰⁾ 右の引用部位は、二人が会話をす
る中で、俊成が世の「物知たる人」について答えた箇所である。両系統本における、人名表記の相違に着目した
い。原態系統本では、伊通を「朝臣」と呼ぶなど、俊成の発話が会話文の様子で記されるのに対して、古本系統

本では名前を割注で区別し、注釈的に表記がなされている。特に梅沢本では「九条大納言伊通大臣」「中院大臣雅定大臣」という具合に、呼称・名前・最終官職が厳格に整えて記されている。つまり原態系統本が会話文そのままの様子であるのに対して、古本系統本は注釈的に整えられた状態となっている。編集による前後関係が問われるならば、古本系統本の状態こそが編集後の状態である。このような表記の様子は第67段にも認められる。

●林本 第67段箇所冒頭

(A型) せうとの具親少将哥に心をいれぬとそにくみ侍し。

◎青山 初雁 斎藤 多和 静嘉堂

●梅沢本 第67段「具親哥ヲ不入心事」冒頭

(B型) せうとの具親少将兵衛の哥に心をいれぬをそにくみ侍し。

◎黒川 呉氏 天理 篠瀬 蓬左 伏見

梅沢本では具親少将に対し、割注でもって「兵衛佐」と示される。ここでの注記が第30段と同一の編集作業であったことは勿論である。古本系伝本が、章段と見出しに加えて、本文もまた整えて記されている様子がわかるであろう。古本系伝本の本文が注釈的に整えられている様子は、次のような場合にも認められる。

●林本 第64段箇所冒頭

(A型) 近比隆信定長とつかひ若より人の口に同やうにいはいはれ侍き。彼俊恵か家に 十座の百首 と名付たることありけり。をのくいとみて心をつくしたりけるにいつれもとらさりけり。

●梅沢本 第64段「隆信定長一双事」冒頭

(B型) ちかころは隆信定長とつかひてわかくより人の口にをなしやうにいはいはれ侍き。かの俊恵か家にて百

首を十首つ、十度によみて
十座の百首 となつけたることのありけるにはいとみてをの／＼心をつく
 したりける。けにいつれもおとらさりけり。

第64段の冒頭を、林本と梅沢本それぞれに引用した。ここでは隆信と定長が比較され、過去の事実として二人の實力が拮抗した様子が描かれている。十座百首はその具体例として語られたものだが、梅沢本ではこの「十座百首」の名称にも注釈の意識が向けられており、「百首を十首つ、十度によみて」という説明が記されている。

●林本 第70段箇所冒頭

（A型） 或人云俊頼の髓脳に定頼中納言云公任卿に式部と赤染かをとりまさりをとほる。大納言云式部はこやとも人をいふへきにとよめる物なり。ひとつ口にいふへからすと侍りければ中納言は 山のはの月と云哥こそ世の人は秀哥とは申侍れといふ。

●梅沢本 第70段「式部赤染勝劣事」冒頭

（B型） 或人云俊頼の髓脳に定頼中納言公任大納言にしきふあかそめかをとりまさりをとほる。大納言いはく式部はこやとも人をいふへきにとよめる物なり。ひとつ口にいふへからすと侍りければ中納言 かさねて云式部か哥にははるかにてらせ 山の葉の月と云哥をこそ世の人は秀哥と申侍めれと云。

第70段冒頭では、定頼中納言により和泉式部の歌「暗きより暗き道にぞ入るぬべき遙かに照らせ山の端の月」がとり上げられる。林本はこれを最低限に「山のはの月」とのみ記す。しかし梅沢本ではこれが和泉式部の歌であることを示して、第四句「はるかにてらせ」をも加えてこれを記している。

第30段・第67段・第64段・第70段を具体例として挙げた。原態系統本との比較で、古本系統本は各所に注釈的な本文を備えている。どちらの系統本が編集後の状態であるかを考えるならば、章段と見出しが整えられ、本文

も注釈的に整えられた古本系統本の本文を編集後の状態と考えるべきであろう。もしこれを逆の方向で説明しようとするならば、極めて不自然な書写状況を想定しなければならなくなる。

四、生じている問題点

●第18段「関ノ清水」箇所

林本 今は（一）三井寺に円實坊阿闍梨といふ老僧

梅沢本 今は水もなければそこもしろる人たになし三井寺に円実房の阿闍梨といふ老僧

林本 建暦の初年（一）対面してかやうに古事を

梅沢本 建暦はしめのとし十月廿日あまりの比三井寺へゆきてあさりたためしてかやうにふるきことを

次に、系統間の異同が『無名抄』本文の理解にどのような影響を及ぼすのかについて考えていきたい。第18段には二か所に大きな異同が見られ、その何れも先の例と同じように、原態系統本には見られない説明的な記述が、古本系統本にて見出されるものである。特に注目されるのは後者「十月廿日あまりの比三井寺へゆきて阿闍梨」の記述である。建暦元年十月二十日余りのとき、長明が三井寺の阿闍梨に面会したとするこの記事をめぐっては、岡田希雄氏により、この年次記載に対する不審が早くから指摘されてきた。岡田氏は『東鏡』建暦元年十月十三日の条を掲げ、長明が鎌倉で実朝に謁して十月十三日に法華堂に参詣している事実を示し、地理的状况を鑑みて、十月二十日余りの頃に長明が三井寺にいることへの不審を指摘する⁽¹⁾。原態系統本にはそもそもこのような日付が

記されていないのであり、『東鑑』との齟齬を考えるならば、やはりこの日付は長明が記したのではなく、後人が加筆したものと考えるべきであろう。

●林本 第10段「コノモカノモノ論」箇所

三条院（梅沢本「二条院」）和哥このませをはしましける時岡崎の三位御師徳にて候はれけるに此道の聞えたかきによりて清輔朝臣めされて殿上にさふらひけり。いみしきめんほく也けるをあるときの御会に（梅沢本清輔）いつれの山とかこのもかのもといふをよまれたりければ三位是を難していはくつくは山にこそこのもかのもはよめ。おほ山ことにいふへきにはあらずと難せられければ清輔申ていはく筑波山までは申へきならず。河などにもよみ侍るへきにこそ……（以下略）……

林本 三条院 ◎青山 初雁 斎藤 多和 蓬左（「三」右わきに別筆の貼り紙「二」）

梅沢本 二条院 ◎黒川 呉氏 天理 築瀬 静嘉堂（異同注記「三イ」） 伏見

林本 御会に（一）いつれの山とかこのもかのもといふをよまれたりければ

◎青山 初雁 斎藤 多和 蓬左

梅沢本 御会に清輔いつれの山とかこのもかのもといふことをよまれたりければ

◎黒川 呉氏 築瀬 ※天理（本文「御會イツレノ山トカ」右傍に「二清輔」の書き入れ）

※静嘉堂（右傍に別筆で「清輔」の書き入れ） 伏見

第10段には二か所に注目すべき異同が見られる。前者の異同は、史実にそぐわない「三条院」の記述が、正しく「二条院」へと修正されたことで生じた異同であろう。⁽¹²⁾蓬左文庫本と静嘉堂文庫本には異同注記が記されており、両系統の伝本が校合されていた痕跡が見られる。またここでは、原態系統本が史的に誤りである「三条院」の記述を、誤ったままに書写している点が注目される。このような書写態度は、原態系統本の本文が注釈的でない様子にも符合するであろう。さて更に注目すべきは後者の異同である。梅沢本以下の伝本には、主語を明記して「清輔」が「このもかのも」の歌を詠んだことが記される。第10段を読む限りにおいて、両系統本に文意の違いは感じられず、その違いは主語表記の有無でしかない。しかしこの出来事を清輔『袋草紙』の記事と照らし合わせるとうであるうか。

『袋草紙』上巻抜粹（新日本古典文学大系より引用）

予、応保二年三月六日に昇殿す。……（中略）……名を隠して歌合はするなり。……（中略）……躑躅の歌に「このもかのも」と詠む歌出で来。[※]範兼難じて云はく、「このもかのもは筑波山の外は詠むべからず。かの山は八方に面あり。面の方に景有るの故なり。何ぞ平地の路に然るべきや」と。顕広云はく、「然なり。近き歌合にもかくの如く難ずるか」と。……（中略）……時に予云はく、「然りといへども、事の外の僻事なり」と。……（中略）……証歌有らば出だすべしと責められ、暫く隔滞す。頻りにその責め有り。予申して云はく、「躬恒が仮名序には、「漢河に烏鵲の与利羽の橋を渡して、このもかのも行きかふ」と書きたる様に覚悟す、如何」と。時に主上より始め奉りて、満座鼓動して簾中に及ぶ。……（以下略）……

※「岩つつじこのもかのもに咲くころは過ぎぞやられぬ峰の細道」（有房集）か。

『無名抄』の本文からは分らないことであるが、実はこの歌合で「このもかのも」の歌を詠んだのは清輔で

はない。つまり第10段は、「清輔」の語が記されていない、原態系統本の状態こそが正しいのである。『無名抄』の執筆に、長明が『袋草紙』を直接利用している様子を考えるならば、長明により誤った主語が記されたとは考え難い。古本系伝本以下に見られる「清輔」の主語は、後に補われたものと考えるべきであり、後人の解釈によつて主語が補われたことで、意図せず原文の文意を違えて伝えているものと考えられる。

なお第18段・第10段に生じているこれらの問題点を、後に原態系統本が修正しているとする見方は現実的でない。そのような修正は、膨大な資料を閲覧できる現代においてさえ容易でなく、加えて原態系統本の本文が注釈的でない様子や、「三条院」のように誤った情報をそのまま伝えている事にも矛盾する。

五、文章が書き換えられている様子

●林本 第16段箇所

雨の降りける日ある人のもとに思ふとちさしあつまりて古ことなとかたり出たりけるついでにまそうの薄と云はいかなるすゝきそなといひしろふほどにある老人のいはくわたのへと云所にこそ此事知たる聖はありと聞侍しかとほのくいひ出たりけり。……（中略）……此薄 同さまにてあまた侍り。ますほの薄ま

そをの薄ますうの薄とて三草は侍也。ますほの薄といふはほの長て一尺はかりあるをいふ。彼ます鏡をは万葉集に十寸のかゝみとかけるにて心うへし。ますをの薄と云は真麻の心也。是俊頼朝臣の哥によりて侍る。ますをの糸をくりかけてと侍るとよ。糸などのみたれたるやう也。ますうの薄とはまことにすはうなりといふ心也。ますはうの薄といふへきをこと葉を略したる也。色深き薄の名なるへし。……（以下略）……

●梅沢本 第16段「マスホノス、キ」

雨のふりけるひある人のもとにおもふとちさしあつまりてふるきことなんかたりいてたりけるつゐてに
 ますほのすゝきといふはいかなるすゝきぞなといひしろふほとにある老人のいはくわたのへといふところに
 こそこのことしりたるひしりはありとき、侍しかとほのくひひいてたりけり。……（中略）……
 このすゝきをなしさまにてあまた侍り。ますほのすゝきまそをのすゝきまそうのすゝきとてみくさ侍な
 り。ますほのすゝきといふはほのなかくて一尺はかりあるをいふ。かのますかゝみをは万葉集には十寸の
 かゝみとかけるにて心うへし。まそをのすゝきといふは真麻の心なり。これは俊頼朝臣の哥にそよみて侍る。
 まそうのいとをくりかけてと侍かとよ。いとなどのみたれたるやうなるなり。まそうのすゝきとはまことに
 すわう也といふ心也。ますわうのすゝきといふへきをことはを略したるなり。……（以下略）……

登蓮法師の逸話部分を省き、第16段の冒頭と末部を、林本と梅沢本それぞれに引用した。第16段で注目されるのは、その冒頭の異同により、章段全体の文意が変わっている様子である。先ずは冒頭の異同に注目したい。林本では「まそうの薄と云はいかなるすゝきそ」として、歌語A「まそうの薄」を対象にして発問がなされている。対する梅沢本ではB「ますほの薄」が発問の対象であり、この発問の歌語が〈見出し〉である。

さて、冒頭部の発問と結びついて問題になるのが、指示語を伴う章段末部「此薄」の説明である。林本では都合四種（ABCD）の歌語が挙げられ、「此薄（Aまそうの薄）」が「三草」（B「ますほの薄」・C「まそをの薄」・D「ますうの薄」）の総称であることが記される。一方の梅沢本では、「このすゝき（Bますほの薄）」が広義には「三草」（B「ますほの薄」・C「まそをの薄」・A「まそうの薄」）の総称であり、狭義には「十寸穂の薄」の意味で

あることが記される。梅沢本では総称の歌語B「ますほの薄」が、その細目である「三草」の歌語と重なっており、林本の三草にある歌語D「ますうの薄」が記されていない。原態系統本と古本系統本では「此薄」の説明が大きく異なっており、その原因は章段冒頭に遡る、歌語の異同に起因する。

冒頭の歌語は、なぜ書き換えられたのであろうか。原態系統本と古本系統本の違いは、見出しの有無である。冒頭の歌語を書き換える必要が生じるとすれば、それは見出しと発問の整合によるものであつたろう。古本系統本が作成された際、章段の冒頭に見出しが置かれたことで、冒頭の「見出し」に「発問」が整合している必要が生じたものと考えられる。発問の歌語が、見出しに合わせて「ますほの薄」へと書き換えられたことでもって、指示語を介して章段末部の文意が変わる結果となり、古本系統本における「三草」の説明を歪めているものと考えられる。

●林本 第49段前半箇所

俊恵語云故左京大夫顕輔かたりて云後拾遺の恋の哥の中に夕暮はまたれし物をいまはたゝ行らんかたを思こそやれこれをおもて哥とおもへり。金葉集云待し夜のふけしをなにゝなけきけん思たえてもあられける身を彼類にせむとなん思給へるをいとかれらにもをとらすけうはあらずこそ侍れといはれけり。しかるを俊恵か歌苑抄中には一夜とてよかれし床のさ筵にやかても塵のつもりぬる哉是をなんおもてうたと思給ふはいかゝ侍らんとぞ。

●梅沢本 第49段前半「代々恋中ノ秀哥」

俊恵語云故左京大夫顕輔語云後拾遺の恋の哥の中には

ゆふくれはまたれし物を今はたゝゆくらむかたをおもひこそやれ

これをおもて哥とおもへり。金葉集には

まちし夜のふけしをなにゝなけきけんおもひたえてもすくしける身を

これをすくれたる恋とせり。わかゑらへる詞花集には

わすらるゝ人めはかりをなけきにてこひしきことのなからましかは

この哥をかのたくひにせむとなんおもひ給ふる。いとかれらにもおとらずけしうはあらずこそ侍といはれ
けり。しかあるを俊恵か哥苑抄の中には

一夜とてよかれしとこのさむしろにやかてもちりのつもりぬるかな

これをなむおもて哥とおもひ給ふる。いかゝ侍らんとぞ。

第49段も両系統本に違いが見られる。梅沢本では『詞花和歌集』の恋の面歌が追加された状態にあり、これに続く顕輔の言説にも違いが見られる。林本では、顕輔によって『後拾遺和歌集』と『金葉和歌集』それぞれに恋の「面歌」が選ばれたあと、「いとかれらにもをとらず稀有はあらずこそ侍れ」（＝さほどこれらの歌に劣らないという歌も珍しくはないでしょう。）という消極的な賞賛が語られ、自身の撰歌が絶対ではない様子が述べられる。第49段では、これを受けて俊恵が『歌苑抄』から恋の面歌を選び、長明がおぼつかなくも『新古今和歌集』から恋の面歌を選ぶのであり、撰歌の是非は後世の読み手に委ねられる結果となっている。一方の梅沢本では、後拾遺集・金葉集からの撰歌に続けて、顕輔自身が撰者である『詞花和歌集』からも恋の面歌が示されており、「いとかれらにもおとらず異けしうはあらずこそ侍」（＝さほどこれらの歌に劣らず、そうおかしくはないでしょう）として、

詞花集面歌が前二首に劣らぬ秀歌として語られる。この場合、後拾遺集・金葉集・詞花集の面歌が等しく勅撰集最高の恋歌として提示されており、俊恵と長明によって恋の面歌が更に挙げられることで、ここでの主題が恋の面歌を列挙することであつたと理解される。

両者の違いは編集前と編集後の違いであり、文意は何れも通じている。内容の違いから編集の前後を判断することは難しいであろう。しかしこれまでの検証により、古本系統本の本文に注釈的傾向が顕わであつたことを踏まえるならば、右の場合も古本系伝本の作成時に情報が付加され、主題の理解に沿って言葉が修整されたものと思われる。

六、本文の校訂によって文意が損なわれている様子

●林本 第71段「近代哥躰」箇所①

人のことはしる身にとりては

中比の人々あまたさしあつまりて侍し会

につらなりて人の哥ともを聞し

かは我思よらぬ風情はいとすくなかりき。我つゝけたりつるよりは是によりけりなと覚ることこそありし

かと（梅沢本・いささかも心のめくらぬことはありかたく）なん侍し。しかるを 御所の御会 につかふまつり

しにはふつと思もよらぬことをのみ人ことによまれしかは此みちはやく底もなくきはもなきことになり

けりとおそろしくこそ覺侍りしか。……（中略）……おほつかなく心籠てよまむとするほとにはてにはみつ

からもえ心えすたかはぬ無心所着になりぬ。かやうのつらの哥は幽玄のさかひにはあらず。けに達磨ともこ

れをそいふへき。

林本

人のことはしる身にとりては

◎青山「人のこと葉知」 初雁「人のこと葉知」 斎藤「人のこと葉知る」 多和「人のこと葉知」

梅沢本

人のことはしらす身にとりては

◎黒川「人のことはしらす」 呉氏「人の事はしらす」 天理「人の事はしらす」

篠瀬「人の事はしらす」 静嘉堂「人のことはしらす」 蓬左「人の事はしらす」

伏見「人のことはしらす」

第71段の一部を林本にて引用した。右の箇所は、後鳥羽上皇の歌会に出席した折の経験を長明が語る部分である。引用冒頭の異同に注目したい。梅沢本の本文では、「人のことはしらす身にとりては」(「他人の事は知らないが、わが身においては」と記されおり、この文を前後に、話題が他者から自身のことへと切り替わる。一方、林本にはこれが「人のことはしる身にとりては」と記されており、梅沢本と同じ内容で読もうとすれば文意は通じない。梅沢本の理解でもって書写がなされるならば、当然、この記述に対して誤写が疑われることになる。

しかし、林本以下、原態系統本の諸本に目を向けるならば、この部位が「人の言葉知る」の意味で記されている様子が確かめられる。この話の中で長明は、《中比の人々あまたさしあつまりて侍し会》と《御所の御会》の様子を、旧風和歌と新風和歌の比較でもって語っている。前者の歌会であれば、長明にとって「我思よらぬ風情はいとすくなかりき」様子であったのに対し、後者の歌会では新風和歌の弊害により、「思もよらぬこと」「みづからもえ心えず」「無心所着」の言葉が氾濫していたのである。⁽¹⁵⁾長明は、そのような新奇な言葉遣いの歌が決して幽玄の歌ではないことを苦々しく語るのであり、あたかもそれが人の言葉ではないかのように、「人の言葉知

る身にとりて」さえ彼らの言葉が理解できないと皮肉を込めて語っているのである。

古本系伝本の書写者は、皮肉を交えたこの言い回しに理解が及ばなかったであろう。この不審な言い回しに誤写を疑い、文意が通じるよう本文を校訂したものと思われる。

●林本 第71段箇所②

能さかひにいれる人々の申されし趣は詮はた、詞にあらはれ餘情姿に見えぬけいきなるへし。心にも詞に

も艶極りぬれは是等の徳はをのつからそなはるにこそ。たとへは秋の夕くれ空の気色は色もなく聲もなし。

いつくもいかなるゆへあるへしともおほえねとすゝろに涙こほるゝことし。これを心なきものはさらにいみ

しと思ひえす。たゝめにみゆる花紅葉をそめて侍る。又よき女のうらめしきことあれとこと葉にはあらはさ

すふかく忍ひたる気色などをほのく見つけたるはことはをつくしてうらみ袖をしほりみせんよりも心くる

しうあはれふかゝるへきかことし。又おさなきものなとはこまゝといはすよりほかはいかてか気色を見て

しらむ。此二のたとへにて風情すくなく心あさからん人のさとりかたきことをは知。又おさなき子のらうた

きかかたこととしてそれとも聞えぬこといひ出たるははかなきに付てもいとをしくきゝ所あるににたることも

侍にや。これらをはいかてかたやすくまねひもしさたかにもいひあらはさむ。たゝみつから心うへきこと也。

又霧のたえまより秋山をなかむれば見ゆる所はほのかなれとおく床しくいかはかり紅葉わたりて面白からむ

と かきりもなくをしはからるゝおもかけ はほとくさたかに見んにもすくれて 心さし詞にあらはれて

月をくまなしといひ花をたへなりとほめんはなにかはかたからん。いつかは哥たゝ物をいふにまさる徳とせ

ん。 一こと葉におほくのことほりをこめ あらはさすして深き心さしを尽す。見ぬ世のことを面かけに

うかへいやしきをかたりて優をあらはしをろかなるやうにてたへなることはりを極むれはこそ心も及す詞もたらぬ時はにておもひをのへわつかに三十一字か中に天地をうこかす徳をくし鬼神をなこむる術にては侍れ。

林本

詮はた、詞にあらはれ餘情姿に見えぬけいきなるへし。心にも詞にも艶極りぬれは……。

梅沢本

栓はた、ことはにあらはれぬ餘情すかたにみえぬ景気なるへし。心にもことはりふかく詞にも艶きはまりぬれは……。

幽玄を語る右の記述は、新古今時代における幽玄論の資料として、『無名抄』の中でも特に重要な記事とされてきた。幽玄とはそもそも俊成歌論にて用いられた言葉であり、俊成が用いる幽玄については、余情による情緒美でありつつも、同時に「あはれ」「さび」「艶」などを包摂する複合的な美意識とされている。しかし『無名抄』でもって長明が語る幽玄は、余情による景気の表出によって説明されるものであり、その単一の視点は俊成の幽玄とは別のものとして扱われてきた。⁽¹⁶⁾しかしこのような幽玄に対する長明の理解は、これまでの『無名抄』研究が、古本系伝本を中心とする、見出しを有する系統のテキストに拠って『無名抄』を理解してきたことによる。梅沢本（古本系伝本）には幽玄が、「栓はた、ことはにあらはれぬ餘情すかたにみえぬ景気なるへし」（＝結局はただ詞に言い表されていない余情であり、姿には見えない景気である）と記されており、幽玄が「余情」による情緒美であると記される。しかし林本（原態系統本）でこれを確認するならば、その本文は「詮はた、詞にあらはれ餘情姿に見えぬけいきなるへし」（＝歌の眼目は明確に詞に表れており、余情が姿には見えない景気となっている）であり、幽玄が「詞」と「余情」によって二元的に説明されている。⁽¹⁷⁾

林本から分かるように、長明は幽玄を「余情」単一で語っていない。幽玄が「艶」を主体とする歌体であることを示しつつ、「詞」と「余情」を二元的に対比しながら、詞〈明確に表れているもの〉と余情〈姿に表されていないもの〉として、背反する二者の融和が幽玄であると定義する。この定義に続けて、長明は幽玄における「詞」と「余情」を、具体的な例でもって説明しようとする。「秋の夕くれ」と「花紅葉」、「（よき女の）こと葉にあらはさすふかく忍びたる気色」と「ことはをつくしてうらみ袖をしほりみせん（女の姿）」を例にしながら、余情と詞の関係、すなわち〈見えないもの〉と〈見えるもの〉の違いを語り、更には「おさなき子」と「霧のたえま」でもって〈言外の美〉が何かを説明する。

〈見えるもの〉と〈見えないもの〉、この対比のもとに、長明は詞を「心さし詞にあらはれ」と語り、余情を「かきりもなくをしはからるゝおもかけ」として、「詞」によって表される美と、「余情」によって喚起される言外の美、この二つが等しく並立することを再度説明する。その上で長明は三たびの説明を繰り返すのであり、幽玄が「詞」と「余情」の複合美であることを、「一こと葉におほくのことほりをこめ」、「あらはさすして深き心さしを尽す」ものとして改めて定義する。〈見えるもの〉と〈見えないもの〉、この背反を「詞」と「余情」により、僅か三十一音でもって完全に表現したとき、和歌は天地や鬼神の心さえも動かすと長明は語る。

原態系統本の本文からは、長明が「幽玄」の本質を極めて深く捉えており、理路整然と、首尾一貫した様子でこれを説明していた様子が確かめられる。長明は幽玄の本質を二元的な理解のもとに語るものであり、全体の主旨から、その冒頭に適切な言説を求めるならば、これが原態系統本型の本文「詮はた、詞にあらはれ餘情姿に見えぬけいきなるへし」であることは明白である。幽玄を余情単一で語る古本系伝本の記述は、幽玄を二元的に論じる全体の論旨と矛盾する。そもそも余情単一の視点で記された幽玄論であるならば、冒頭の助辞を一語置き換え

るだけで、原態系統本のように全体が統一された二元的幽玄論に書き換わることはない。

長明は、この二元的な幽玄の理解が高度な理解力と知識を求めるものであり、読み手に正しく伝わらないことを危惧していたのであろう。実に同じことを三度も繰り返してこれを語っているのであるが、実際に長明の本意は後世に伝わらなかったことになる。長明の幽玄論については今後改めて詳細が問われるべきであらう。長明が語る幽玄論は、古本系統本には正しく伝わらなかったものであり、幽玄を余情単一で説明する古本系統本の解釈が、長明の幽玄論として後世に伝わったことになる。

幽玄を語るこの文章において、その文意を大きく変えているのは、「あらはれぬ」とする打消しの助動詞一語である。これは先に検証した「人のことはしらす」の場合も同様であった。更に翻えれば、第10段の「清輔」の語も、単に主語が補われただけのことである。これらの異同は、書き誤りや改変を意図したものではなく、むしろ本文校訂の一環であったと考えるべきであらう。書写者（編集者）の理解に沿って、文脈にそぐわない不審な助辞を修整し、主語を補うことで、より文意の整った本文にすべく善意の校訂が行われたと推測される。それゆえ古本系伝本の本文は、理解が容易で整った本文になっており、一見して文意に不都合も感じられない。しかしその書き換えにより、古本系伝本に連なる各本には、長明の執筆意図の一部が正しく伝わっていないものと考えられる。

七、まとめ

原態系統本と古本系統本の相違について検証してきた。この二つが、形態と本文の両方から完全に別系統の本

であること、またその分岐が『無名抄』の改編作業に端を発している様子が確認されたであろう。

検証に先立ち、原態系統本（章段なし・見出しなし・A型本文）と、古本系統本（章段あり・見出しあり・B型本文）の比較が、最終的には、原態系統本全体と古本系統本全体の視点で問われるべきことを指摘した。その検証の結果として、原態系統本の本文に比べて、古本系統本が注釈的な本文を有し、また情報が補われ、文脈が整えられている様子が確かめられた。しかしその一方で、古本系統本の記述には、長明の記述とは考えにくい、不審な記述も含まれていたのである。二系統の間には、記事全体の趣旨が大きく変更されている箇所があり、また原態系統本に語られている長明の執筆意図が、古本系統本には正しく伝わっていない箇所も確認された。そしてこれらの異同が、原態系統本から古本系統本への方角で書き換えられている様子は各検証の折ごとに触れてきたとおりである。もしこれを逆の方角で考えるのであれば、章段と見出しの有無、そして本稿にて示した異同のそれぞれに、これを否定する合理的な説明が必要になる。

この二系統の伝本を比較することによって、両系統本の特徴は、より明確なものとなるであろう。まず原態系統本は、章段と見出しが無く、地の文と和歌の区別もされていない。また本文の記述にも晦渋さが感じられ、注釈的要素を少なくした本である。これに対して古本系統本は、章段が設けられ、見出しが付され、地の文と和歌は改行して区別されており、本文も注釈的に整えられた本であり、つまりは書式と本文に編集が施された本である。鑑賞に与するのは勿論、後者である。古本系統本が作成されたことで、以後は古本系統本が中心となって『無名抄』は流布していったのであり、古本系統本が『無名抄』の流布に果たした役割は極めて大きい。しかし古本系統本への編集作業は、書式の改編のみでなく、本文の修正作業にも及んでいたのである。今後の『無名抄』研究は、原態系統本と古本系統本との対向により、『無名抄』の本文を再検証していく作業が必要になると

考えられる。⁽¹⁸⁾

注

(1) 早い指摘として佐佐木信綱編『日本歌学大系 第三卷』(「長明無名抄」解題 風間書房 一九五六)は、『無名抄』の伝本について、「その異同も少くないが、誤脱を除けば、内容は殆ど何れも同じである」と記し同一系統本として扱う。また築瀬一雄『俊恵研究』(「俊恵法師話——『無名抄』の異文について——」加藤中道館 一九七七)は、「写本の数はかなり多く、語句の異同は限らないけれども、或る程度長い異文と見るべきものは、さほどに存しない」として、現存伝本に異本が確認されない旨を記す。両者は『無名抄』の原形が章段を有さない状態であったことを指摘しつつも、現存する伝本については何れも同系統としてこれを扱う。

(2) 茅原雅之「『無名抄』伝本における原態系統本について——見出しと章段の形成過程——」(「古典論叢」第二十八号 二〇二四・九)

(3) 以下、『無名抄』伝本の系統分類は、木下華子『鴨長明研究——表現の基層へ』(勉誠出版 二〇一五)の分類に従う。木下氏は『無名抄』伝本を、古本系伝本である第一類本と第二類本、およびその混淆本である第三類本とに大きく分類する。第一類本・第二類本・第三類本一群二群三群は、何れも見出しと章段を有する同一系統本である。第三類一群は第一類本との共通性が指摘される伝本であり、対して第三類二群の伝本は元享四年の奥書を有し、かつ第二類本との共通性が指摘される伝本群である。また第三類三群は弘安・正応年間の奥書を有する伝本群であるが、独自の増補部位を有し、古態性の劣る様子が指摘されている。本稿では、古本系伝本である第一類本と第二類本、およびその混淆による伝本群を総称して、「古本系統本」と呼称する。なお本稿にて稿者が原態系統本として扱う林羅山旧蔵本と多和文庫本は、木下氏の分類では第三類第四群に分類される。

(4) 詳細については、注(2)論文を参照のこと。

(5) 区分点の位置は伝本によって異なり、その区分は古本系伝本より未分化な状態にある。原態系統本五本の様子と併せて、詳細は注(2)論文を参照のこと。

(6) 注(2)論文。校合本の略称等もこれに準ずる。

(7) 本文引用は国立公文書館内閣文庫蔵林羅山旧蔵『無名抄』に拠る。

(8) 本文引用は国立文化財機構ウエブサイト「e国宝」デジタル資料に拠る。

(9) 異同が原態系統本形（A型）と古本系伝本形（B型）にまたがる天理本・蓬左文庫蔵本・静嘉堂文庫本が、二系統の混態本であることは注(2)論文にて論じた。なお本稿考察で以下に取り上げる本文異同は、何れも原態系統本と古本系伝本とに分かれることから、特に留意すべき点がない場合、以下、伝本個々の異同を省略する。

(10) 保延四年一一三八年、俊成二十五歳。藤原伊通が内大臣となるのは保元元年一一五六年。源雅定が内大臣となるのは久安五年一一四九年。

(11) 岡田希雄「雀羅草堂雜記」(『国語国文の研究』第十四号 一九二七・一一)。岡田氏は『無名抄』の成立上限に言及して第18段を取り上げ、建暦元年十月二十日余りの記述に不審を示しつつも、この日時が『無名抄』の成立上限になり得ることを指摘する。また久保田淳『無名抄』補注(『日本古典文学大系』歌論集 能楽論集 一九六一)もまた、「この年次記載が誤記又は後人の書き加えでなければ、本書はこれ以後の成立とみられるから、この記載は注目される」とを注記している。なお久保田氏は、第18段が長明主体の記事ではなく、ここに登場する「或人」の経験であるという解釈を示し、第18段が『東鑑』との齟齬にはあたらなとする見解を示す。

(12) 『無名抄』の執筆に『袋草紙』が利用されたことは先学諸氏の多くが指摘するところである。またこの点については拙稿「『無名抄』の〈歌人評〉構成部について——歌人評分割の理由と長明の和歌観——」(『語文』第百七十二輯 二〇二二・三)にて詳しく論じた。この第10段における「三条院」の記述については、長明による錯誤が疑われる。『袋草紙』上巻には「このもかのも」をめぐるこのときの様子が詳しく記されており、この中で二条院は「主上」の尊称で表記される。この記事のすぐ後に見られる「この齋宮は三条院の第一皇女なり」とする記述に目を向けるならば、長明が「主上」を「三条院」と錯誤した可能性が考えられる。

(13) 注(12)論文を参照のこと。

(14) 見出しと章段区分については古本系伝本の間でもかなりの相違が見られる。従来より『無名抄』の原形に見出しと章段がなかったと考えられてきたのもこのためである。注(2)論文を参照のこと。

(15) 第71段で長明が語る言葉の氾濫については、拙稿「家隆における西行歌受容考——「心の果」と「しのぶの奥」——」(『人文科学研究紀要』第五十八号 日本大学 一九九九・一〇)にて詳しく論じた。

(16) 『和歌文学辞典』「幽玄」の項目を参照のこと。(桜楓社 一九九二)

(17) 日本文学における幽玄の起源と発達に、『和歌体十種』高情体の記述「詞雖凡流、義入幽玄」や、基俊判詞「詞雖擬

古質之体、義似通幽玄之境」があつたことはつとに知られる。幽玄を「詞」と「余情」によつて二元的に捉える長明の理解は、『和歌体十種』や基俊判詞に見られる幽玄の二元的理解に連なるものである。またここで長明が述べる「餘情姿に見えぬけいきなるへし」を正しく解釈するならば、「余情」の表象を「景気」としており、「余情」と「景気」は不可分にして別のものである。しかし本稿では説明の便を図り、これらを簡易に「余情」として扱う。

(18) 国立公文書館内閣文庫蔵林羅山旧蔵『無名抄』については、「国立公文書館内閣文庫蔵林羅山旧蔵『無名抄』翻刻」と題して、『古典論叢』第二十九号(二〇二五・七)および第三十号(二〇二六・七、予定)に、上下分冊にて翻刻した。

日本大学法学部機関誌執筆要領

令和3年11月18日機関誌編集委員会決定
令和3年12月15日 執行部会議承認
令和3年12月16日 教授会報告
令和4年 4月 1日 施行

1. 本要領の目的

本要領は、日本大学法学部機関誌編集委員会（以下「編集委員会」という）にかかる機関誌に投稿する際の基本的手順について定めるものである。

2. 投稿資格者

- (1) 法学部、法学研究科および法務研究科の専任教員、名誉教授および定年退職した元専任教員
- (2) 以下の者については、編集委員会の審議を経て単著の投稿を認めることがある。なお、投稿に際しては、法学部専任教員の推薦状を必要とする。
 - ① 法学部非常勤講師
 - ② 法学部客員教員
 - ③ 法学部以外の日本大学専任教員
 - ④ 法学部付置研究所研究員および法学部所属の日本大学研究員
 - ⑤ 法学部校友および法学部関係者で研究業績が認められる者
- (3) 学外の研究者は、法学部専任教員の投稿の共著者となることができる。
- (4) 大学院法学研究科博士後期課程学生は、指導教員の許可を得て『日本法学』に「判例研究」を投稿することができる。
- (5) 前4項の規定にかかわらず、退職記念号および追悼論文集については、別の定めによる。

3. 研究倫理の遵守と権利保護

- (1) 投稿原稿は未発表のものに限る。他誌との二重投稿は認めない。また注釈なく自己の既発表著作と重複する記述をすることは認められない。
- (2) 剽窃、捏造、改ざん等の研究不正を行ってはならない。また投稿原稿については、著作者が適正に表示されていなければならない。
- (3) 研究・調査対象に関する権利保護（資料の使用許諾や個人情報保護に関する同意等）、および翻訳に関する権利について、必要な手続きを投稿前に完了していなければならない。
- (4) 利益相反に関する倫理を遵守するとともに、利益相反情報を申告しなければならない。
- (5) 機関誌に掲載された著作物の著作権のうち、複製権および公衆送信権を日本大学法学部に譲渡する。ただし、著者自身による複製権および公衆送信権の行使を妨げない。

4. 原稿種別

投稿は以下の種別で受け付ける。

- (1) 論説
- (2) 研究ノート
- (3) 判例研究（『日本法学』のみ）
- (4) 特別講演
- (5) 翻訳
- (6) 資料
- (7) 書評
- (8) 雑報

5. 原稿の作成

- (1) 原稿は、A4用紙に適当な文字数で打ち出す。
- (2) 分量の上限は、文字数で概ね22,000字（刷り上がり約25頁）とする。それを超えるものについては、原則として分割して掲載する。ただし、編集委員会は、他の掲載原稿のページ数を勘案し、その上限の変更を認めることができる。なお半面1ページ大の図表1枚に付き900字を原稿文字数に含めるものとする。
- (3) 連載を前提とする長大な原稿についても、完結分までの完全原稿を投稿するものとする。
- (4) 表題と氏名には、和文表記および欧文表記を併記する。
- (5) 注、参考文献の表記法は、当該分野の慣例に従うものとする。

6. 原稿の提出

- (1) 原稿は、投稿票、要旨（800字程度）と合わせ、デジタルデータで研究事務課に提出する。

デジタルデータは、原則として電子メールの添付ファイルで研究事務課宛に送付する。
- (2) 原則として、投稿締切日を過ぎた原稿は受け付けない。
- (3) 原稿提出後の原稿の差し替えはできない。

7. 審査

別に定める「日本大学法学部機関誌審査要領」に則って行う。

8. 校正

- (1) 執筆者による校正は、原則再校までとする。加筆、訂正は最小限とし、特に再校時に頁数が変わるような加筆や削除は避ける。再校返却の際は、タイトル頁に「校了（または責了）」と明記する。

- (2) 校正は1週間程度で返却しなければならない。著しい返却の遅滞は、次号掲載になることもありうる。

以 上

- 本誌に掲載の全ての論文につきましては、以下の Web サイトで PDF を電子公開しております。

日本大学法学部ホームページ (<https://www.law.nihon-u.ac.jp/>)

- 本誌の受入れに関しまして、送付先（住所・宛先等）の変更や受入辞退等がございましたら、以下まで御連絡ください。

<連絡先部署> 日本大学法学部研究事務課

(住 所) 〒101-8375 東京都千代田区神田三崎町 2-3-1
(T E L) 03-5275-8510
(F A X) 03-5275-8537
(E-mail) kenjimu.law@nihon-u.ac.jp

執筆者紹介（掲載順）

和田万紀 日本大学特任教授 茅原雅之 日本大学非常勤講師
鹿野しのぶ 日本大学非常勤講師

機関誌編集委員会

委員長	柳瀬	昇	委員長	高畑	英一郎
副委員長	竹本	亨	委員長	友岡	史仁
副委員長	小野	美典	委員長	中野	明広
委員	石橋	正孝	委員	野村	和彦
委員	大岡	聡也	委員	松島	雪江
委員	大久保	拓也	委員	山野	本直
委員	黒滝	真理子	委員	野中	貴弘
委員	小佐藤	聡明	委員	前西	一馬
委員	杉本	英也	委員	生垣	琴絵
委員		竜	委員	大野	久敏

桜文論叢 第113巻（非売品）

令和7年9月20日印刷
令和7年9月30日発行

発行者 小田 司

発行所 日本大学法学部
機関誌編集委員会
東京都千代田区神田三崎町2-3-1
電話 03（5275）8510番

印刷所 株式会社メディオ
東京都千代田区神田猿樂町2-1-14 A&Xビル
電話 03（3296）8088番

ŌMON RONSŌ

Vol. 113, September 2025

CONTENTS

— MATERIAL —

- WADA Maki*, Characteristics of the Time Perspective of High School Infirmary
Students as Manifested in the Circle Test: From the Interpretation of the
Results of the Circle Test Image Analysis 1

— NOTE —

- SHIKANO Shinobu*, An Annotation of the Four Seasons Part of *Minamoto Tsuneuji*
Kashu 62

— ARTICLE —

- KAYAHARA Masayuki*, A Study on the Text of the Original Form of *Mumyosho*: A
Re-examination of its Textual Content 88